

常照

佛教大学図書館報

59
2010



佛教大学図書館所蔵

目次

- ・ 図書館長4年間のつばやき……………山崎高哉……………1
- ・ 佛教大学図書館の古籍籍について……………藤堂祐亨……………3
- ・ 図書館利用教育……………福井京子……………4
- ・ 平成二十一年度図書館関連委員会委員名簿……………6
- ・ 新収資料紹介 御伽草子『大江山奇譚』……………古川千佳……………(1)

「廣澤池」

色刷木版画『都名所百景』の一。『都名所百景』の版元は大坂の石川屋和助、通称石和、絵師は本図の東居ほか都合五名を数える。広沢は王朝から今日まで観月の地として知られ、本図は池畔釣殿からの構図と思われる。現在、本学宗教文化ミュージアムが存在するあたりの景色だろうか。嵯峨富士ともいわれる遍照寺山にかかる月をめぐる人の手元にはすでに火鉢が見える。

この地にゆかりのある宇多天皇は後の月見を好んだともいわれ、旧暦九月十三夜のひんやりとした空気が伝わってくるようである。

いにしへの人は汀に影たえて月のみ澄める廣澤の池 源三位頼政

図書館長4年間のつぶやき

図書館長 山崎 高哉



2006（平成18）年4月1日、図らずも佛教大学附属図書館長を拝命しました。それ以来、4年の長きにわたって図書館長を務めさせていただいたことに心から感謝申し上げますとともに、所期の目的を十分達成できず、心苦しく思っています。4年間、どんな思いで図書館長を務めさせていただいていたか、その「つぶやき」の一部を書き記すことにします。

- 2006（平成18）年4月1日、図書館長拝命。利用者のニーズに最大限配慮した図書館サービスの充実・向上と和やかで働き甲斐のある職場環境の創出に努めたいと決意。利用者の安全と資料の保全を図るため、図書館1階入り口に入退館ゲート開設。
- 2006（平成18）年6月15日、広島修道大学で開催の私立大学図書館協会2006年度西地区部会総会に出席。2004（平成16）年の第20回日本図書館協会建築賞に輝いただけに図書館の施設設備と利用者サービスの素晴らしさに驚嘆。
- 2006（平成18）年10月12日、大学基準協会の「相互評価・認証評価」にかかる実地視察。常照ホールを主会場に、午前10時から午後5時近くまで。約20分間、図書館の視察あり。私は大学評価委員会委員長兼任。朝から緊張の連続。12月末、大学基準協会から「相互評価結果（原案）」送付。図書館の施設設備、地域との共生、専門員制度の導入、通信教育課程の学生のための送本貸出・返却サービス等に高い評価。
- 2007（平成19）年4月3日、新入生オリエンテーション時に、図書館の存在とサービス活動を紹介するため、図書館利用ガイダンスを初めて実施。図書館長として挨拶。
- 2007（平成19）年4月7日、新図書館開館10周年。新図書館建設は大学の開学80周年記念事業の一環。開館10周年記念事業は、入学オリエンテーションと重なるため、10月5日に開催と決定。
- 2007（平成19）年10月5日、新図書館開館10周年記念事業実施。記念講演会とシンポジウムの開催、浄土宗文献室所蔵の『浄土教報』のデジタル化とその公開、記念資料『丹鶴叢書』の購入、貴重資料の公開、記念グッズの作成・配布など。挨拶で歴代館長、國枝利久、山田泰嗣、池見澄隆の3先生の功績を称えるとともに、本図書館の機能・サービスの今後ますますの充実・発展を誓う。
- 2008（平成19）年4月1日、「輪蔵だより」に「私の心に火をともした青春の書12選」連載開始。「読書離れ」「活字離れ」の進行を食い止めるため、1回生の間に読書の楽しさを味わい、読書の習慣を身につけてほしいと願い、恥を忍んで、我が大学1回生時代の読

書ノートを公開。

- 2008（平成19）年8月26日～9月21日、日本教育学会第67回大会が8月29、30日に本学で開催されるのを祝して、本学図書館所蔵の教育学の名著を展示。併せて、京都大学大学院教育学研究科・教育学部図書室のご好意で、「篠原文庫」一有名な教育学者篠原助市とご子息陽二両先生の二代にわたる蔵書の集成一から、ペスタロッチとヘルバルトの初版本を展示。今後も、大きな学会が本学で開催される場合、その開催に協賛して、関係蔵書の中から名著を選びすぐり展示する予定。
- 2008（平成19）年9月11日～12日、國學院大学で開かれた第69回（2008年度）私立大学図書館協会総会・研究大会に参加。次年度当番校として挨拶。2008年3月に竣工されたばかりの学術メディアセンター内に設けられた國學院大学図書館の機能の充実振りと貴重書の質量共の素晴らしさに圧倒される。
- 2009（平成21）年4月1日、「輪蔵だより」に「若者の心をとらえた青春の書12選」連載開始。私が前任校で、全学の1回生対象の「ポケット・ゼミ」や教育学部の2回生対象の「教育学基礎演習」で読んだ青春の書のうち人気の高かった12冊を選び、順次紹介。
- 2009（平成21）年8月27日～28日、本学で第70回（2009年度）私立大学図書館協会総会・研究大会開催。初日の開会式に来賓として文部科学省研究振興局情報課学術基盤整備室長飯澤隆夫氏、情報・システム研究機構国立情報学研究所学術基盤推進部長安達淳氏及び本協会会長校、関西大学市川訓敏図書館長が臨席、挨拶。また本学の山極伸之学長挨拶。記念講演は八木透文学部教授による「京都のまつりとくらし」、好評を博す。懇親会はしようざんの楼蘭で。大盛況。本学浜岡政好副学長出席、挨拶。翌日は、情報通信技術の進展により多様化・大量化している電子媒体と伝統的な紙媒体とを有機的に結びつけ、利用者に効果的に提供していくハイブリッド大学図書館としての役割をテーマにシンポジウム開催。先進的な取り組みをしている大韓民国の圓光大学校と東京都千代田区立千代田図書館から講師を招き、活発な意見交換。成功裡に閉会。
- 2009（平成21）年11月11日、図書館委員会で、通信教育部の参考図書の電子貸出システム導入に関し、その契約に不備があるとともに、手続きに全学的な合意が得られていないとの理由で、来年度の予算は認められないとの異議が出る。数回の臨時委員会を開催するも了承を得られず、予算計上は断念。我が不徳のいたすところ、責任痛感。
- 2010（平成22）年2月15日、図書委員会で、館長としてその後講じた善後策を説明。依頼業者との交渉により、契約を結び直したこと、関係部局との話し合いにより、学生サービスの向上のために、この事業を推進することで合意、今後連携・協力のあり方を詰めていくこと。図書館委員会で十分な審議を尽くすために、規程改訂の必要性を感じ、館長私案を作成し、それを基に改訂作業を館内で進め、次期館長に申し送ること。

最後に、21世紀社会の特徴である「知識基盤社会」において、大学図書館もその学術的、社会的使命を果たすために、ハイブリット図書館化を図り、利用者の学修・教育・研究活動支援をより一層充実させることを願って止みません。 （教育学部教授・やまざき たかや）

佛教大学図書館の古典籍について

藤 堂 祐 亨

本学図書館は、昭和9年鹿ヶ谷より校地を紫野に移し、新学舎が建設されると時を同じくして建設された。浄土宗檀信徒上村常治郎の遺志を受け継いだご遺族の資金提供により、「成徳常照館」と命名された図書館が誕生した。また昭和38年、開学50周年を期して地上2階並びに書庫の増築を行ない、さらに開学60周年を記念して浄土宗の寺院、同窓ならびに保護者の支援によって、地上5階地下1階の複合図書館棟が建設された。私が学生として在籍した頃のこと、その図書館棟も紫野校地再整備のため、解体された。

在籍当時の図書館長は、名著『日本文庫史』をはじめ、本学図書館が編集した『古稀記念 小野則秋図書館学論文集』などの著作があり、日本図書館学の権威であった小野則秋教授であった。その頃の蔵書数は約15万冊で、昭和48年4月から日本十進分類表による分類法（NDC分類）を採用することになったのである。浄土宗の僧侶養成機関として設立された本学の蔵書は仏教とくに浄土教関係の書籍を中心に構築されてきたため、それらに適用した本学独自の分類法で、龍谷大学図書館の分類法を参考にしたものであった。しかし、学部学科の新・増設や学問分野の多様な展開は蔵書数の増大のみならず内容の多様化を伴ない、それに対応できる分類法が求められた結果である。

NDC分類への変更は、おもに洋装本を中心にこなされたが、和古書については、上記独自分類のままで凍結し、昭和54年以降和古書の整理方法を変更し、「国書」「佛書」「宗書」に分けて分類整理した。

「国書」は、仏教以外の和古書、「佛書」は、仏教のなかでも浄土宗（『仏書共通分類法』188.4）以外の和古書を示し、「宗書」は、『仏書共通分類法』の浄土宗に分類される和古書である。

また、カード目録で利用に供していた浄土宗諸寺院からの寄贈和古書は、寄贈受入時の受領リストをもとに、存否確認を行いつつ、再度目録をとりなおしてカードを作成した。

昭和54年3月に『成願寺文庫書籍目録稿』を皮切りに、昭和55年8月に「西谷寺文庫」、

同年10月「萬福寺文庫」、昭和61年3月「天性寺文庫」と、手書きの目録稿が刊行された。構成について、各文庫は浄土宗、仏教、外典の3部に分け、50音順の書名索引を付している。

また宗書は、仏教文化研究所により、昭和55年『佛教大学図書館所蔵和漢書中 浄土宗学関係書籍目録稿』が作成され、その後の収蔵書や分類変更分を含めて、作成された目録カードを縮小し、書名索引を付して昭和63年6月『佛教大学図書館所蔵和漢書中 続浄土宗学関係書籍目録稿』が刊行された。

宗書を除く仏書については、昭和63年8月に『佛教大学図書館所蔵和漢書中 佛書目録稿』が刊行され、昭和63年刊行された2つの目録稿が合本され、第1部仏書、第2部宗書の構成で『佛教大学図書館蔵 佛教関係 和古書目録稿』として刊行された。

国書については、昭和63年10月『佛教大学図書館蔵 和古書目録稿』が、平成3年1月『佛教大学図書館蔵 和古書追加目録』が刊行された。

平成2年頃には日本の大学図書館の目録作成は、コンピュータの時代へと変わりつつあった。平成3年6月、本学でも図書館コンピュータシステムの導入が決定され、翌年から本稼働を開始した。学術情報センター（現国立情報学研究所）に参加接続し、全国の大学図書館の共同作業によるオンライン・コンピュータ目録作成を開始したのである。コンピュータ目録へのデータ入力通常整理から遡及整理へと拡大し、本学における古典籍も、現在ではコンピュータにデータ入力することで、目録作成、再整理を行い、現代人の利用者の検索に応えることを目指している。

平成23年、開学100周年を迎えるにあたり、古典籍の整理、なかでも佛書、宗書、寺院文庫のデータ入力に努めているところであるが、今後は加えて軸物など視覚的資料については視覚も導入した目録の構築も考えていかなければならない。

『佛教大学図書館の歴史と使命—佛教古典籍を中心に—』（『輪蔵だより』第39号）を加筆訂正したものである。

（図書課長・とうどう ゆうこう）

図書館利用教育

福井京子

(1) 情報リテラシー

現在の大学教育の課題のひとつとして、情報リテラシー教育の充実がある。さまざまな情報が〈錯綜〉している中で、それに振り回されない能力の獲得は必要不可欠の課題である。情報を自由に駆使できるようになるに越したことはないが、そこに情報リテラシー教育の目標を定めるのには少し無理がある。しかし、情報に対して一定の批判的な位置を取することは訓練次第で可能になろう。図書館の重要な使命は、この一端を担うことにある。

コンピューターが支配的になった現在、一般的に、コンピューターを操作し、資料検索が速くできれば、リテラシー能力が向上したように捉えられる。しかし、それはリテラシー能力そのものではない。問われるのは、その内実である。

リテラシーとは、多くの分野で使われ、国によっても意味が異なっていることばだが、日本では、読み書き能力または日常生活を送るうえに必要な能力という意味で使われてきた。情報リテラシーの定義についても、これまでさまざまな分野で議論が重ねられてきた。日本の図書館界では、情報リテラシーとは、必要な情報を認識し、探索し、読み解き、効果的に利用・表現する力と理解されている。

(2) 図書館利用教育

日本図書館協会によって1998年に発表された「図書館利用教育ガイドライン：大学図書館版」（以下、ガイドラインと略す）を挙げたい。

1993年9月『図書館雑誌』87巻9号に以下のガイドラインの素案である、「総合ガイドライン」および「大学図書館版」が公表された。ここで提示された案は、表1で示すものとは異なり、図書館利用教育の目標を「PR」、「オリエンテーション」、「利用指導」の3レベルにおいていた。

その後、情報環境の変化に対応するべく検討され、まとめられたものが、表1のような5領域、「印象づけ」、「サービス案内」、「情報探索法指導」、「情報整理法指導」、「情報表現法指導」である。もし図書館利用教育の目標が前の3領域にとどまるならば、図書館は利用者の情報を発信する権利を保証することにはならないことになる。「情報整理法指導」と「情報表現法指導」を付け加えることによって、ガイドラインは図書館として行うべき情報リテラシー教育支援の全体像を示めし得たのである。

このガイドラインにおける理論の組み立ての特徴は、ACRL (Association of College and Research Libraries : 米国大学研究図書館協

会)の情報探索法指導ガイドライン(Guidelines for Bibliographic Instruction in Academic Libraries,1977)の考え方を参考にし、その基本にある非営利機関のマーケティング(non-profit marketing)の理論を取り入れていることである。また、指導目標の特徴としては、近年の情報環境の急激な変化や、日本

での社会的な図書館認知度等を考慮して、ACRLガイドラインの「情報探索法指導」領域を中心に据え、その前に「印象づけ」(User Awareness)と「サービス案内」(Orientation)の2領域を置き、その後に「情報整理法指導」と「情報表現法指導」の2領域を追加して、合計5領域構成としたことが挙げられる。

領域	内 容	
領域1	印象づけ	各自の情報ニーズを充たす社会的機関として図書館の存在を印象づけ、必要が生じた場合に利用しようという意識を持つようにする。
領域2	サービス案内	各自の利用する図書館の施設・設備、サービスおよび専門的職員による支援の存在を紹介し、その図書館を容易に利用できるようにする。
領域3	情報探索法指導	情報の特性を理解すると同時に、各種情報源の探し方と使い方を知り、主体的な情報探索ができるようにする。
領域4	情報整理法指導	メディアの特性に応じた情報の抽出、加工、整理および保存ができるようにする。
領域5	情報表現法指導	情報表現に用いる各種メディアの特性と使用法を知り、目的に合った情報の生産と伝達ができるようにする。守るべき情報倫理を伝える。

表1 「図書館利用教育ガイドライン：大学図書館版」

このガイドラインの発表にあたって日本図書館協会図書館利用教育委員会は、ほとんどの大学で実施されている「オリエンテーション」レベルを突破して、「最終的には大学教育のカリキュラムの中にこれを組み込み、全学的な情報教育の統合化を達成しなければならない。このガイドラインはその第一歩として、図書館主体で行う図書館利用教育の体系化と組織化を図ったものであり、これにより大学教育に図書館として積極的に貢献することを目指すものである」と述べている。図書館利用者教育は、情報リテラシー教育の一

環として全学的に取り組むことができるように、教育体制の整備充実を必要としており、大学図書館はそれに積極的に協力・貢献していくことが求められている。

(3) おわりに

いま、大学図書館にとって必要なものは、学内、学外に対する図書館の位置についての実証的な説明理論である。そのとき、情報リテラシー教育は、図書館の存在意義を明確にするひとつの大きな役割を果たすはずである。

(図書館情報サービス専門員・ふくい けいこ)

平成21年度図書館関連委員会 委員名簿

○図書館委員会

浜岡 政好 (副学長)
中原 健二 (文学部長)
東山 弘子 (教育学部)
的場 信樹 (社会学部長)
植田 章 (社会福祉学部長)
二木 康之 (保健医療技術学部長)

◎：委員長

○：副委員長

◎貝 英幸 (文学部総務担当主任)
○黒田 恭史 (教育学部総務担当主任)
○上田 道明 (社会学部総務担当主任)
○岡本 晴美 (社会福祉学部総務担当主任)
○白星 伸一 (保健医療技術学部総務担当主任)
小林 隆弘 (財務部長)
山崎 高哉 (図書館長)
藤堂 祐亨 (図書課長)
古川 千佳 (図書館専門員)
飯野 勝則 (図書館専門員)
志麻 克史 (図書館専門員)
福井 京子 (図書館専門員)

○図書館収書委員会

○貝 英幸 (文学部総務担当主任)
○黒田 恭史 (教育学部総務担当主任)
○上田 道明 (社会学部総務担当主任)
◎岡本 晴美 (社会福祉学部総務担当主任)
○白星 伸一 (保健医療技術学部総務担当主任)
山崎 高哉 (図書館長)
藤堂 祐亨 (図書課長)
古川 千佳 (図書館専門員)
飯野 勝則 (図書館専門員)
志麻 克史 (図書館専門員)
福井 京子 (図書館専門員)

○学部選書委員

(文学部) 太田 修、小野田俊蔵、貝 英幸、齊藤隆信、鈴木文子、瀬邊啓子、
坪内稔典、西川利文、松田和信、持留浩二、門田誠一
(教育学部) 荒井真太郎、石原 宏、奥野哲也、黒川嘉子、黒田恭史、篠原正典、
竹内 明、竹内晋平、東山弘子、牧 剛史、松瀬喜治、宮下照子、
免田 賢
(社会学部) 上田道明、大谷栄一、大場吾郎、林 隆紀、松永寛明
(社会福祉学部) 池本美和子、岡本晴美、神谷栄司、里見賢治、末崎栄司、
中田智恵海、朴 光駿、波多野和夫、芳野俊郎、若尾典子
(保健医療技術学部) 赤松智子、石井光昭、越智淳子、日下隆一、坂口光晴、
白星伸一、得丸敬三、中野裕之、野村 巖、藤川孝満、
二木康之、山田恭子

○浄土宗関係コレクション選定グループ

齊藤隆信、善 裕昭、松永知海

御伽草子 『大江山奇譚』

おおよまきたん

御伽草子とは物語のジャンルのひとつで、室町時代から江戸時代初期ごろまでに製作された比較的短編の物語であり、中世小説、室町物語、室町小説などとも呼ばれている。御伽草子については、『常照』第五十八号において、大坂の書肆、淡川清右衛門が多くの伝承作品の中から二十三篇を輯めて、『御伽文庫』（『御伽草子』とも）として享保（一七一六〜三六）の頃に刊行したことにその名が由来することも合わせて述べた。

『大江山奇譚』は、『御伽文庫』には「しゅてん童子」という題名で収録されており、そのほかにも「酒呑童子」「酒天童子」「酒伝童子」「酒顛童子」「酒呑童子絵巻」「大江山」「大江山絵詞」「大江山絵巻」等多くの異なる名称で伝承されている。

御伽草子には『秋夜長物語』『あしびき』『三人法師』『高野物語』『阿弥陀の本地』『愛宕地藏之物語』『熊野の本地』『梵天国』などのように宗教物と分類され、仏教と深く結びついた作品が多く存在する。『大江山奇譚』の中でも、天下無双の武者とたたえられた源頼光が、戦いの前には神仏の加護を願い、神仏の化身によって勝利に導かれるという人間の姿が描かれているが、前号に紹介した御伽草

古川 千佳

子の分類に当てはめるならば、武家物といった分類がなされる作品である。

さて、本書の題簽および箱蓋には「大江山奇譚」、箱側面には別筆の墨書が「大江山酒呑童児物語り 全三巻揃」とある。「酒呑童子」あるいは「大江山絵詞」という名称が一般的に通用しているが、本文内容は、大鬼・酒呑童子の住処により大江山系、伊吹山系の二系に分類される。

本学所蔵『大江山奇譚』に登場する酒呑童子の住処は「せんちやうかたけ」「大江山」のような表現がなされており、「せんちやうかたけ」とは「千丈ヶ嶽」つまり、丹波国大江山であり、書名の「大江山奇譚」と一致する。しかし一方では「みやこより北いふきのすそせんちやうかたけ」といった近江国伊吹山を思わせる表現もある。さらには、「丹波國いふき」という表現もあり、伝承の過程で誤ったものなのか意図的に表現したものかはわからないが、二系が混同されている。他機関所蔵本を見てみると、大東急記念文庫本『しゅてん童子』には「あふみの国いふきのふもと」と出てはくるものの、「せんちやうかたけ」（千丈ヶ嶽）とあり、本学所蔵本ほど

の表現ではないが、伊吹山と大江山の混同は他本にもみられるようである。

本学には本書と同様に、文部科学省の私立大学助成事業の一環として設備助成により購入することのできた『羅生門』二巻を所蔵している。両者とも、勅命を受けた源頼光が、美女をさらって都を騒がせていた鬼を退治するという共通したストーリーが基本となり、体裁も同じく絵巻物に仕立てられた奈良絵本であるが、表現にはかなりの違いがみられる。

『大江山奇譚』（『酒吞童子』）には、美しいとばかりは言えない場面が多々見られ、奈良絵本製作の目的のひとつであった貴族や大名の姫君たちの嫁入り調度品としては、あまり似つかわしくない部分も多く含んでいる。

同じ主人公による鬼退治談ではあっても、『羅生門』には都でのシーンが多く登場するのに比して、『大江山奇譚』はその名のごとく、都の郊外、荒々しい千丈ヶ嶽（大江山）、不気味な鬼ヶ城を描く場面に絵や詞の多くが割かれている。

人間が足を踏み入れることもできないような険しい山中で、酒吞童子は都の貴族のような屋敷を構えて、客殿や庭のしつらいまでなされた、表向きにはひじょうに豪華な暮らしをしている。客殿の床の間には何の本なのかはわからないが、冊子と巻子が並べられている図もあり、知的な生活空間であることさえうかがわせる一方で、『羅生門』にはみられないような鬼の生活習慣について、当時の人々が考えていた残忍な鬼の行為が具体的な表現で描かれている。もち

ろん架空の話なのではあるが、そのうらにはある種、人間の思想が存在するはずであり、それらを考えるうえでも重要な要素を含んだ作品といえる。

【ものがたりのあらすじ】

神話の時代を過ぎた日本では、一条院の代になって国は栄え、人々の暮らしも大変よくなったが、都から若い女人達が次々と消え失せるといふ事件が発生する。その数があまりに多くなり、大騒ぎとなって、朝廷も見過ごすことはできなくなった。

娘を奪われた池田の中納言國賢という貴族が、占いが的中することと有名であった安倍晴明という相人を召してたずねたところ、千丈ヶ嶽の鬼・酒吞童子の仕業という。いてもたってもいられなくなった國賢卿はこのことを御門に奏聞する。報告をうけた御門は清和天皇の流れを引き、武芸に長ける源頼光に鬼退治の勅命を授けた。頼光はその四天王である渡辺綱、坂田金時、占部季武、碓井貞光等を伴い神の加護を願って石清水八幡宮、住吉社、熊野社に参詣し、さらに藤原保昌を加えて、都合六人で千丈ヶ嶽へと向かったが、道中険しく、人の通う道とも思えない山道を進み、ようやく鬼の城へとたどり着く。出発前に参詣した三所の神仏の加護とともに、鬼に捕えられていた姫達の案内もあり危機を乗り越える。頼光は途中で仏神化身の男達にもらっていた毒酒を童子、鬼の眷族に飲ませ、体の自由を奪ったうえで討ち取り、生き残った姫達を連れて都へ帰還する。

本学所蔵資料『大江山奇譚』の書誌調査にあたり、国立国会図書館古典籍資料室、静嘉堂文庫、大東急記念文庫において貴重な資料の閲覧を快く御許可いただきましたことに心より感謝申し上げます。

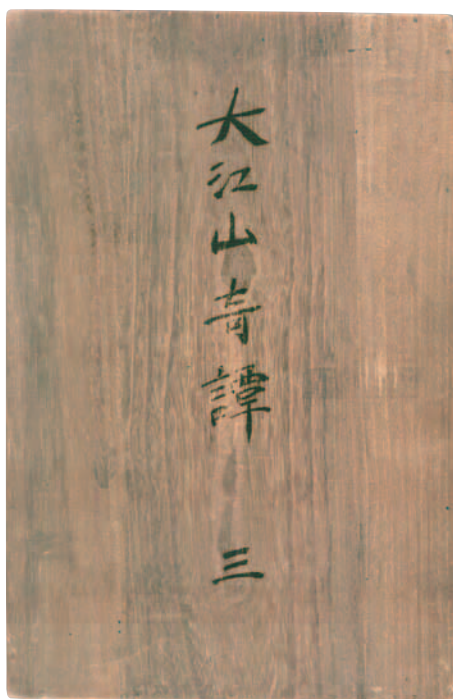
(図書館首席専門員・ふるかわちか)

【書誌】

仏手柑に宝巻、分銅、七宝、丁子などの宝尽をあしらった文様を織り出した茶色地の縹子織布表紙に箱蓋書と同筆で「大江山奇譚」と墨書された金色題簽が貼付されている。箱の側面には「大江山酒呑童児物語り 全三巻揃」「特／第拾四番」の墨書も見られる。三軸に仕立てられた卷子装の見返しには金の大小砂子が細かに散らされ、絵と詞書の部分が交互に配される絵詞の体をとる。

本文行間には、はじめは墨筆による薄い極細の界線が引かれているが、途中からは押界によって行が整えられている。

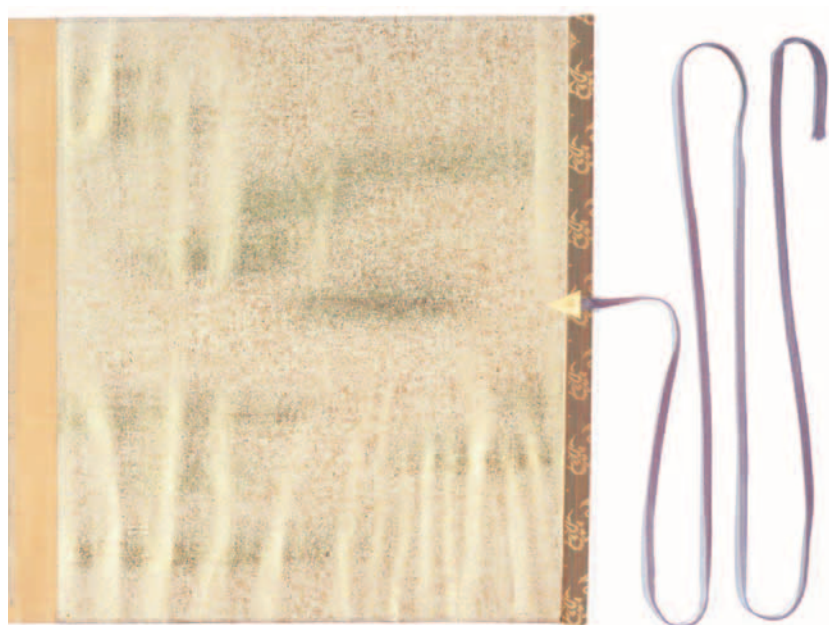
本書には本文本紙の継ぎ直し、および絵と詞の継ぎ直し等、改装のあとが見られる。改装の折に行なわれたと思われるが、本紙の周りには軸装に見られる中廻しのような布地がほどこされ、絵の部分にはおそらく錯簡かと思われる箇所がある。石清水八幡宮、住吉社、熊野社三所に参詣したのち、千丈ヶ嶽に向かった頼光等は、参詣した石清水八幡宮、住吉社、熊野社三所の神仏の化身である男三人に途中の山中で出会うのであるが、その出会う場面と、そのうち三人の家に招かれもてなされる場面とが逆になっている。



本標題	大江山奇譚
外題	大江山奇譚 (題簽)
内題	無し
箱蓋書	大江山奇譚
通称	酒呑童子
製作	江戸時代中期ごろか
形態	卷子装
数量	三軸
大きさ	三六・八cm (紙高)、三四・八cm (本紙高)
題簽	金色紙
表紙	茶色地仏手柑宝尽文縹子表紙
見返し	金砂子散し
本紙	薄手烏子紙に奈良絵および墨書
裏紙	烏子紙
界線	墨界、押界
詞書	漢字交じり平仮名文



『大江山奇譚』

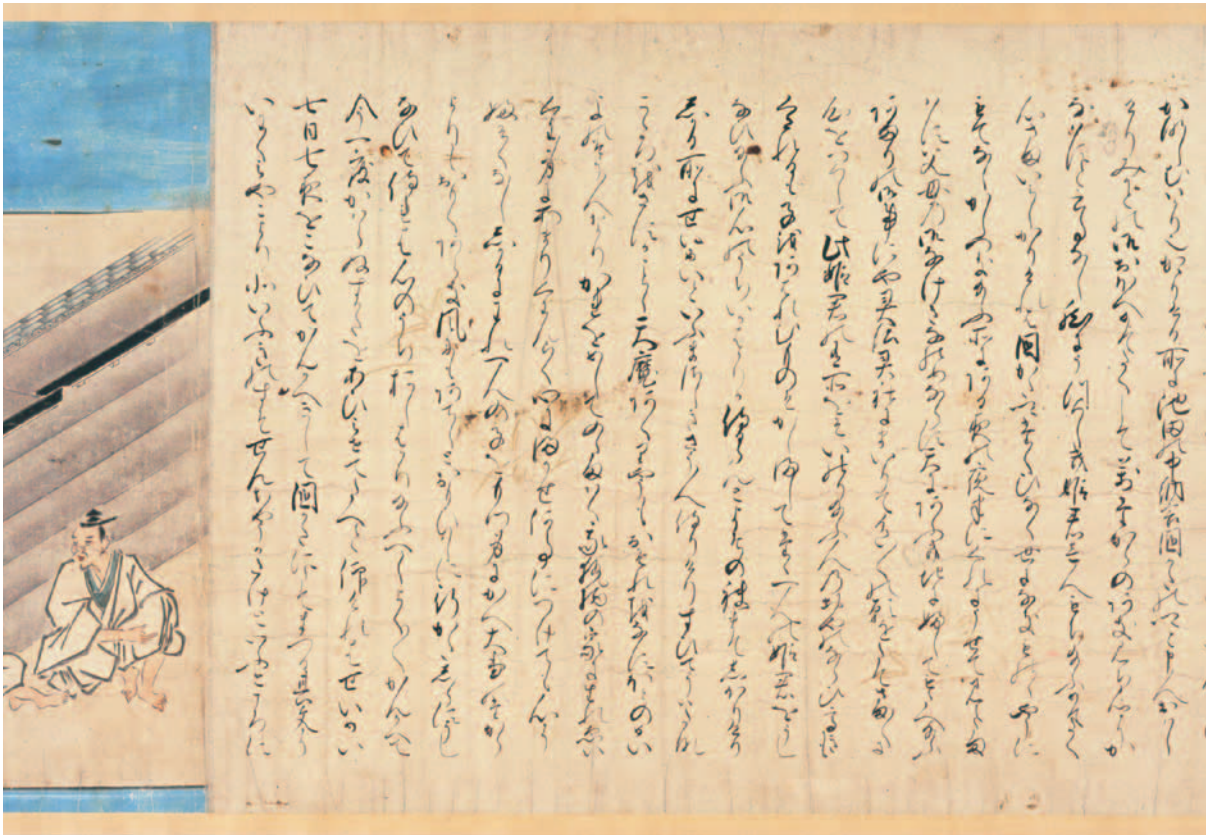


夫日本我てうはこれ神國にて天神七代地神五代すき
 人皇の代となりてしやうとく太子はしめて佛法をひろめん
 ために王となりてれんみんをはこひじひをたれたまひし
 よりしやうむてんわうゑんきのみかとまでも佛法王法に侍りて
 まつりことすなほにしてはんみんをあはれみたまひしこと
 唐帝のいにしへ堯舜の御代にもこへつへしされはにやかせ
 やわらかにして枝をならさす世しつかにしてつちくれを破らす
 國土あんおんにして人民までもたのしみゆたかなりしかるに
 一条院の御宇に至りてなを佛法さかんにして万民ともに
 たのしみけることなめならずか、りければ武家のちうしん諸道の
 古人いんやうのまさしきにいたるまでこの時にあつまれり上代
 にも末代にもか程のものともあるへしともおほへす天下のふつき
 みことのはんしやう今の時なりければかゝる御代にあはん事ある
 ましとそ申あひける然にみやこにふしきの事そいてきける
 人民をゑらますみめかたちのうつくしき女房うせける事数しら
 すはしめ五人十人は其身のふしやうかまたしゆ行とんせいのためか
 など、いろ／＼にい、なげきかなしむといへともひろうするにてたて
 なかりしかあまりにおほくうせければこれ天下のわつらひ万民のな
 けきたとへんに物なしいつくよりなもの候とも又はまゑんのしは
 さともしりたらはこそいかなるほうへんもあらめた、いか、せんとなげき

【翻刻】

夫日本我てうはこれ神國にて天神七代地神五代すき
 人皇の代となりてしやうとく太子はしめて佛法をひろめん
 ために王となりてれんみんをはこひじひをたれたまひし
 よりしやうむてんわうゑんきのみかとまでも佛法王法に侍りて
 まつりことすなほにしてはんみんをあはれみたまひしこと
 唐帝のいにしへ堯舜の御代にもこへつへしされはにやかせ
 やわらかにして枝をならさす世しつかにしてつちくれを破らす
 國土あんおんにして人民までもたのしみゆたかなりしかるに
 一条院の御宇に至りてなを佛法さかんにして万民ともに
 たのしみけることなめならずか、りければ武家のちうしん諸道の
 古人いんやうのまさしきにいたるまでこの時にあつまれり上代
 にも末代にもか程のものともあるへしともおほへす天下のふつき
 みことのはんしやう今の時なりければかゝる御代にあはん事ある
 ましとそ申あひける然にみやこにふしきの事そいてきける
 人民をゑらますみめかたちのうつくしき女房うせける事数しら
 すはしめ五人十人は其身のふしやうかまたしゆ行とんせいのためか
 など、いろ／＼にい、なげきかなしむといへともひろうするにてたて
 なかりしかあまりにおほくうせければこれ天下のわつらひ万民のな
 けきたとへんに物なしいつくよりなもの候とも又はまゑんのしは
 さともしりたらはこそいかなるほうへんもあらめた、いか、せんとなげき

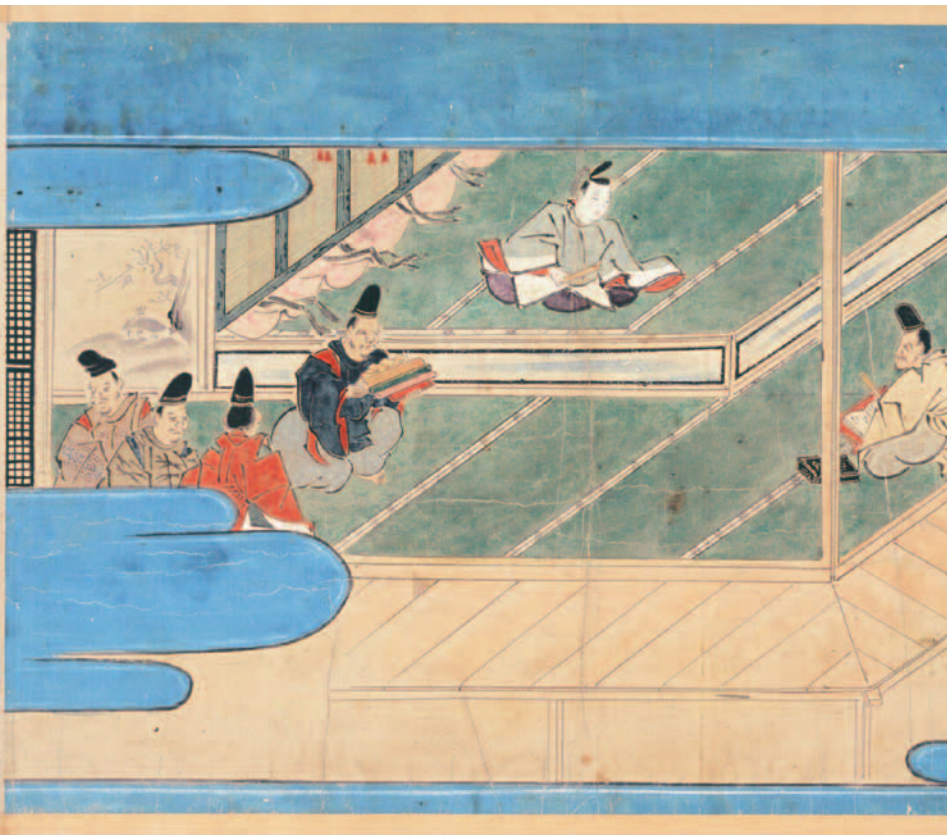
かたじけなくおぼしめし池田の中納言國かたの卿と申人おはし
 けりみかとの御おほへめてたくして萬たからのあきみち心にか
 なはずと云事なし然にうつくしき姫君若人もち給ふめてたく
 心さまいみしかりければ國かた卿たくひなく世になきもの、やうに
 もてなしかしつき給ふ所にある夜の夜半にくれにうせて見えたま
 はす父母の御なげきのめならず天にあふき地にふしてもたへ給ふ
 あまりの御事にや灵仏灵社にまいりて色く願をたてさまく心
 をつくして此姫君の有所をそいのり給ふ人のおやのならひ高きも
 くだれるも子をあはれむものそかしましてた、一人の姫君をうし
 なひ給ふ御心のうちいかはかりか侍るらんとよその袂までしほりけり
 しかる所にせいめいといふまさしきさう人侍りけりすひてうはたな
 こ、ろをさすかことく天魔あくりやうもおそれをなすほどのめい
 よのそう人なりかれをめしてのたまはく我執柄の家に生れゑい
 くわ身にあまりくわんらく心にまかせ何事につけても心に
 ふそくなししかるにわれ一人の子をもつ身にかへ大事のたから
 よりもおもくあらし風にもあてしとおもひしに行かたしらすうし
 なひて侍れば心のうちおしはかり給ふへしよくくかんかへて
 今一度かはらぬすかたをあひみせてたへと仰せければせいめい
 七日七夜をこなひてかんかへきして國かたにたてまつる其文に
 いわくみやこより北いふきのすせせんちやうかたけといふところに



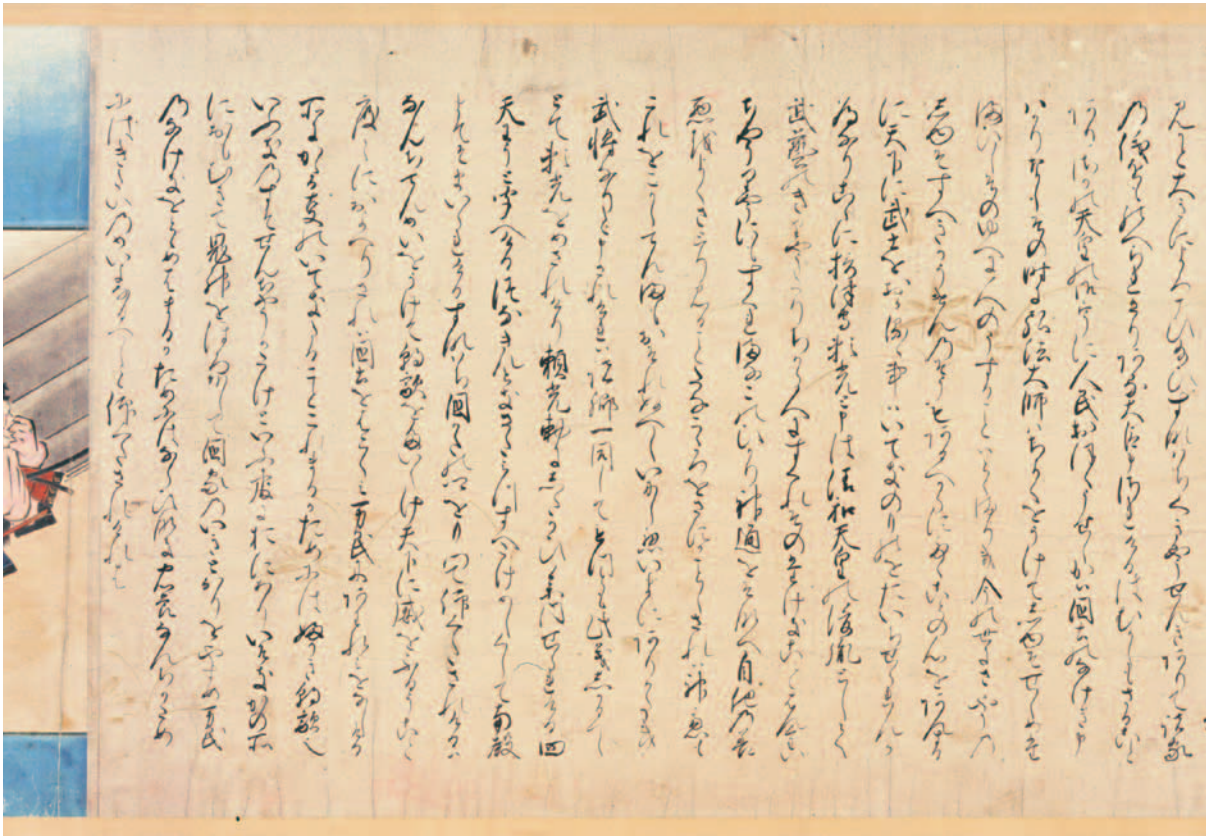


▲一人娘を奪われた國賢卿の屋敷に安倍晴明が招かれ、
姫の行方を占っている場面。

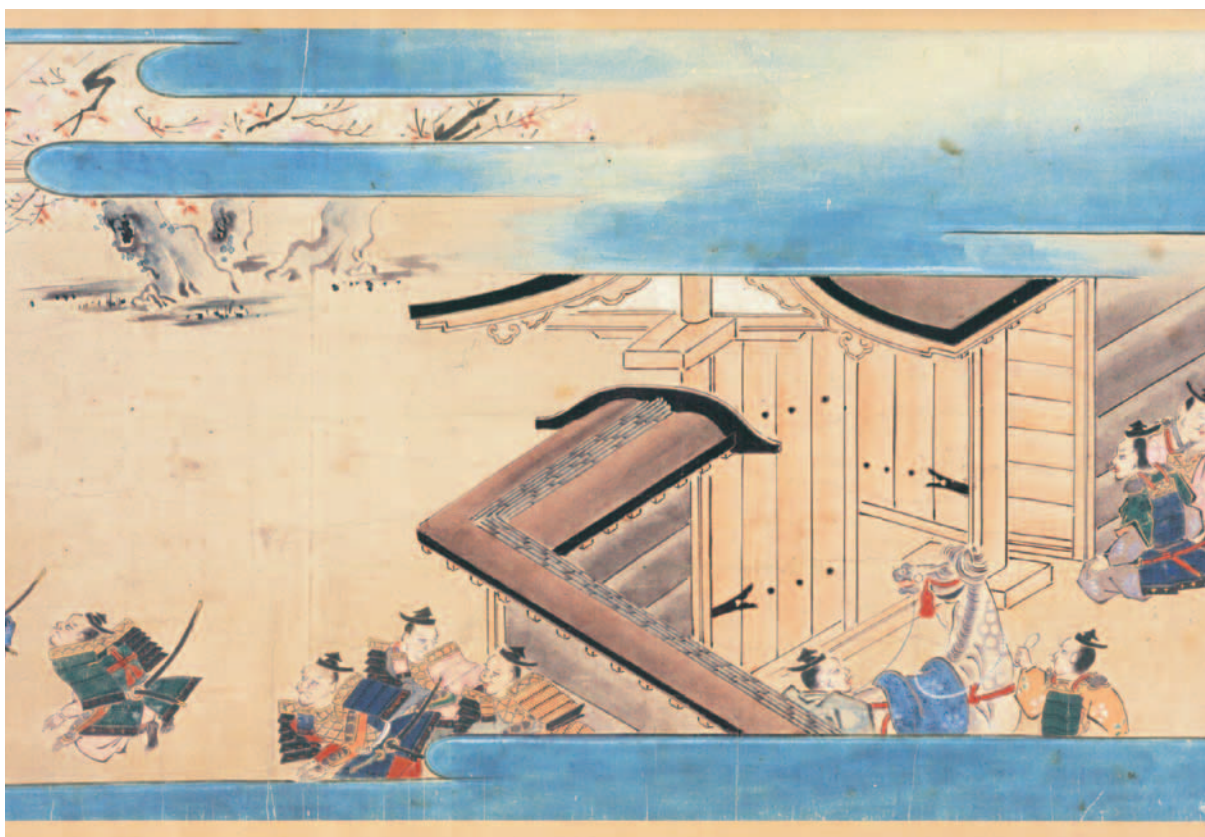
▲國賢卿に占いの結果を報告する安倍晴明。



岩やありすなはちおにのすみかなりかのおにの名をは酒吞童子
 といふなりこのおにのしわさなり姫君はいまたしゝたまはす我
 神符をもつてかのおにの死をのかれて父母のこうかんにいれん
 としし申したりければ國かたの卿此よしを聞たまひてなめならすに
 おほしめしければかのかんもんをもてみかとへそうもんし給ふ所に



えとてふはなとてひもひしめりしうやせんとしうりては歌
の儀をけりしときうりて天竺よりうりしをいひしときい
りしは天竺をけりしに人民おほくし女もいづれもけりし
いりしときいづれも弘法大師はちよくうけてしゆせしめ
しゆすへきかうけんの人をうすることとはとまりき今の世にさやうの
に天下に武士をおかるゝ事はいてきものをたいちせられんか
為なりこゝに攝津守頼光と申は清和天皇の後胤として
武藝のきりやうたりちから人にすくれそのたけきことはんくわい
ちやうりやうにもすくれまなこのひかり神通をそなへ自他の善
悪をよくさとりみることたなこゝろをさすかことしされは神慮も
これをこかしてんまもおそれぬへしいにしゑいまにありかたき
武将なりと申されければ諸卿一同してもつとも此義しかるへし
とて頼光をめされけり頼光勅にしたかひ参内せられる四
天わうと聞へけるつなきんときさたみつすへたけめしくして南殿
までそまいられるすなはち國かたの卿をもつて仰くたされけるは
なんちてんめいをうけて朝敵をたいらげ天下に威をふるうこと
度々におよへりされは國土をはこくみ万民にあわれみをなしける
所にかゝる叟のいてきたることこれまるかためにはふかき朝敵也
いふきのすせせんちやうかたけといふ處におにありいそきかの所
におもむきて鬼神をほろほして國家のいきとおりをやすめ万民
のなげきをとめはまるかためにはならひなき忠節なんちかため
にはきたいのめいよなるへしと仰くたされければ

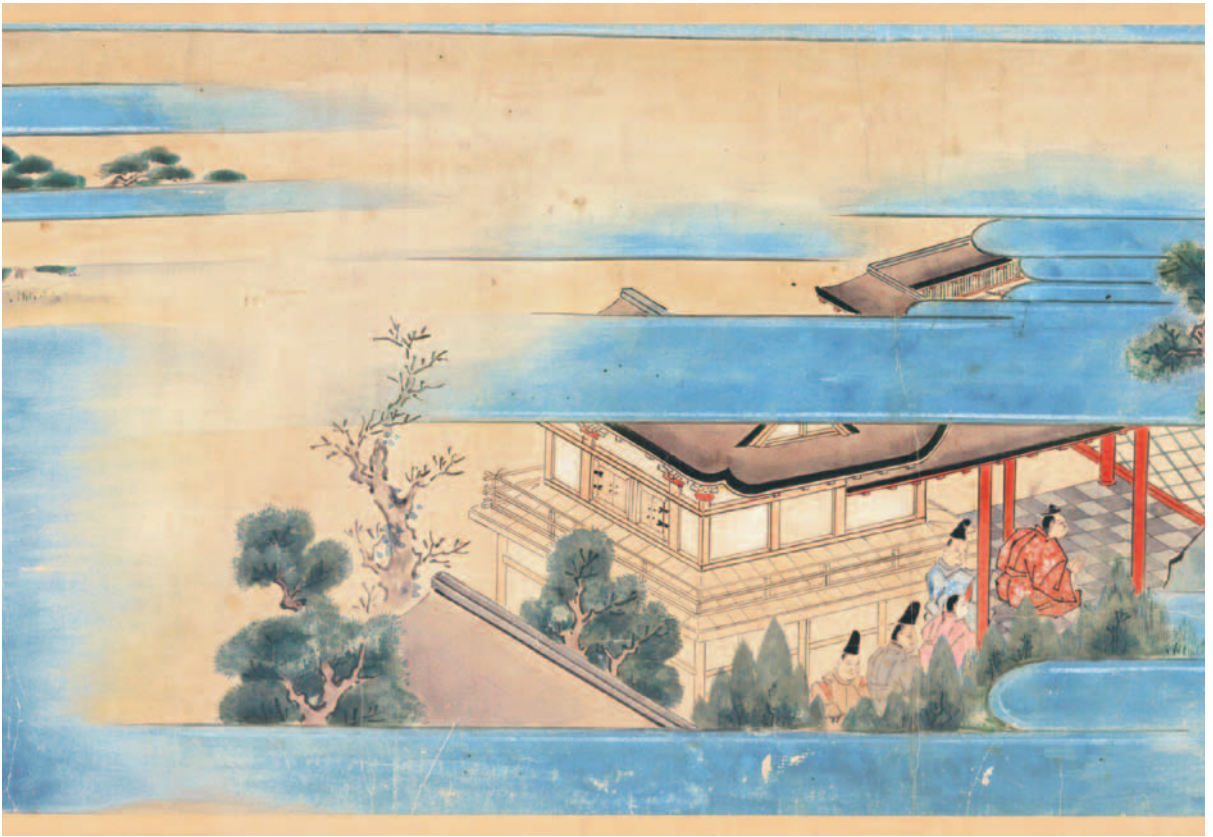


▲◀ 晴明の占いの結果を受けて、鬼退治の勅を受ける源頼光等。



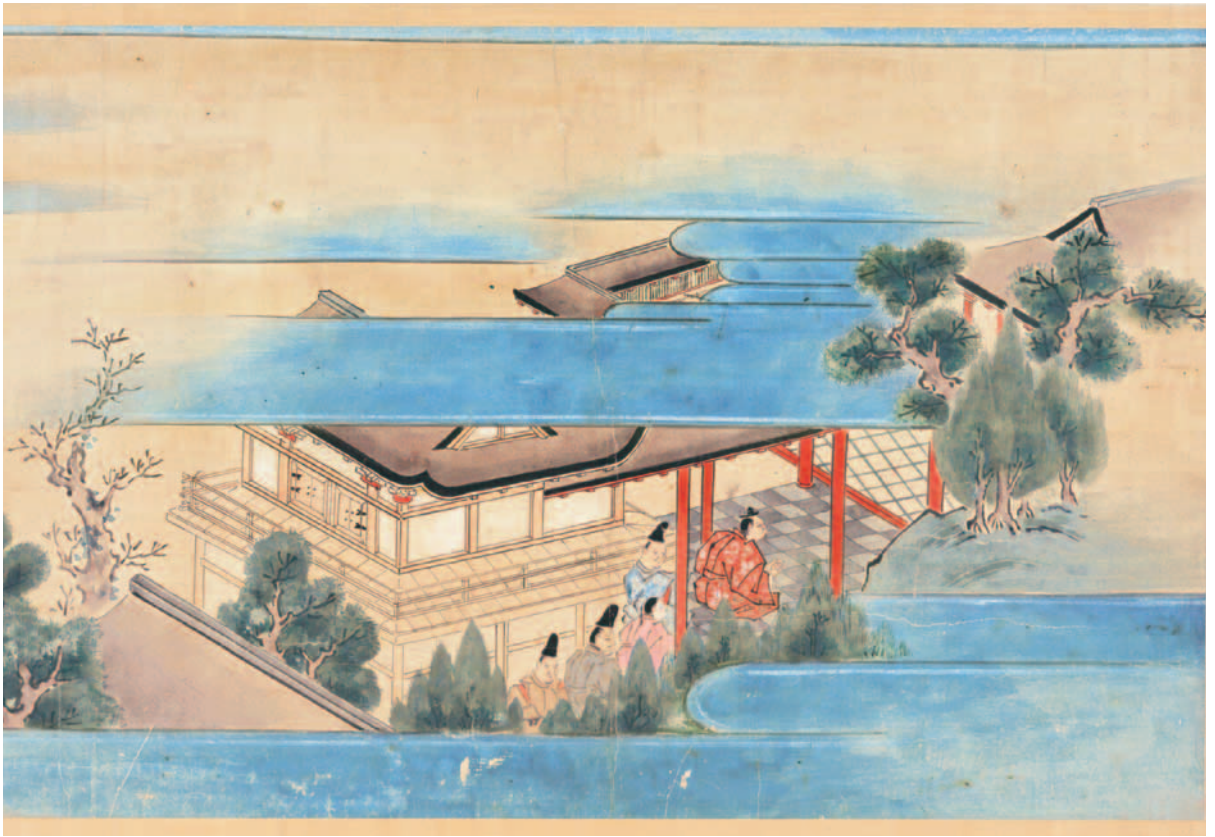
頼光ちよくをうけてやすくとりやうしやう申我宿所に帰りて
 四天わうの人くひやうじやうせられるはよくくこの心をあ
 むするに凡夫のちからにてはおよひかたし佛神の御かこをたのみ
 奉り申さんこれ國土民のためなれはなとか神明も御納受な
 かるへきとおのく神社に参詣していのり申されけるまつ頼光
 は八幡宮にまいり三日三夜こもり給ひしに御霊夢をかう
 かりてすなはちよろこひてほうへいを奉り給ひけりつなきん時
 は住よしへまいりけりさたまつすへたけは熊野三所を勧
 請してきせいなたなこゝろをあわせけり頼光のたまひけ
 るはそんなむねあり大せいはかなふましなんちらはかり召
 くすへしそのほか保昌をかたらふへしとてつれられける
 都合六人をのくめんめんに出立てみなく山ふしの姿に
 なりておひを一ちやうつ、かけられたり頼光のおひの中
 にはひおとしのはらまきに獅子王といふかふとをそへて

▲鬼退治に向かう前に神仏の加護を得るため、参詣する場面。



「大江山奇譚」

▲石清水八幡





(13) 頁上段 石清水八幡
 (13) 頁下段 住吉社

熊野社 ▼



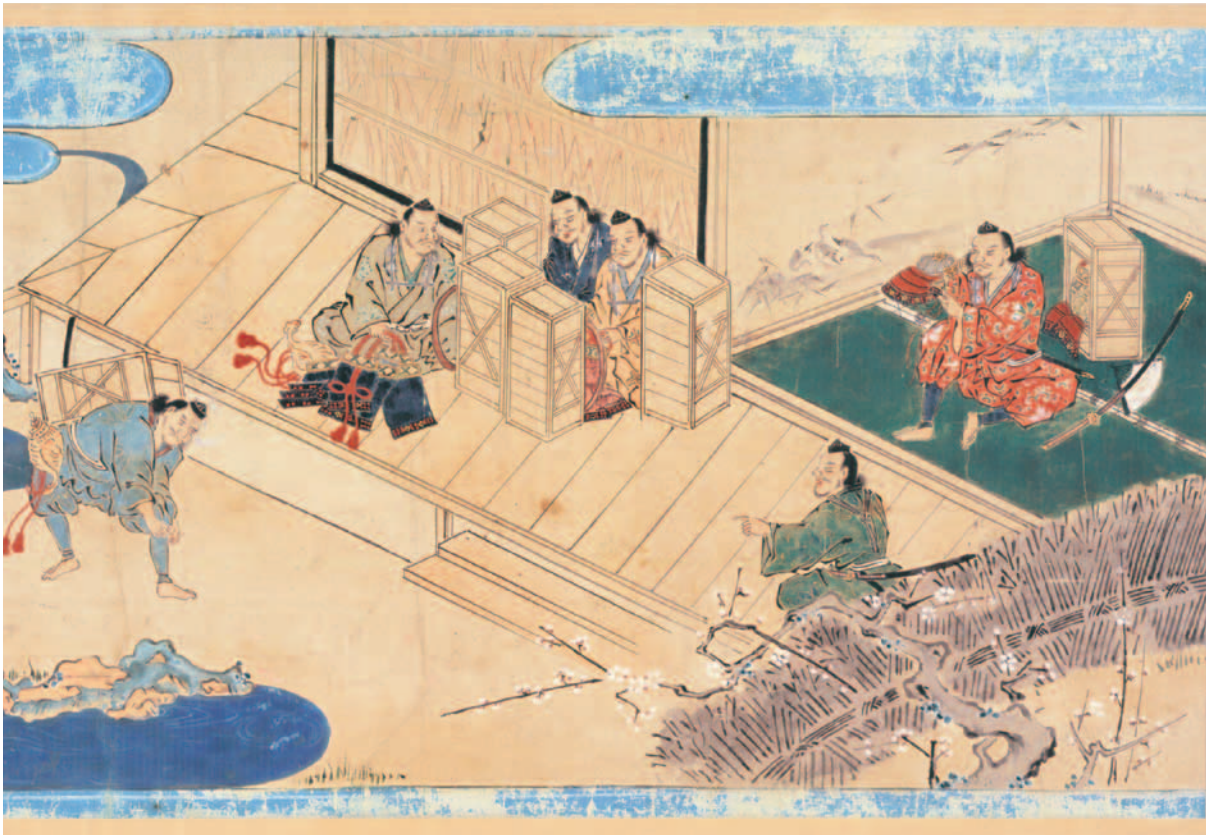


いれられたるくもきりとて二つのつるき有二三尺ありけるち
すいをそ入られたる保昌はむらさきいとおとしのはらまきにわ
きりといふ小長刀の二三尺あまりありけるをなかごをうちきり
つかを三束計にこしらへて馬の尾をもつてねたまきに
まかせたりけるをいれられけりつなはもよきのはらまきに
鬼きりといふうち刀を二尺あまりにこしらへたる太刀をいれ
けるのこる人々もおもひくにこしらへておひの中へそ入
にけりおのく六人都をたちて丹波國いふきのわきに
つきければ大江山とたつねせんじやうかたけを人ことに尋
けれとしらすとこそはこたへける

さて大江山をこへ野をすき行ことかぎりなしたまし
おそれめも心もまよ身もくるしみすいなふをくたきせんご
ほうぜんとしてそおほしける野くれ山くれ行ほどに大なる
ほらありいそきたちより見るに立家あり五十あまり成
おと二人山伏老人立たりつな申けるはこのものともは鬼の
けんそくともとおほへて候これらをとらへて事の子細をおたつね
はやと申ければ頼光のたまひけるはまつしはらくかれらに心を
つけなはあしかるへしいかにもくしのひよりてよきやうにあいし
らいて心をとりの城のうちのあんないをもたつね侍らんとてかの
者ともにのたまひけるやうはこれは諸國修行の行人にて候か

みちにはふみまよひて来り候こ、おはいかなる所とか申そ大道へは
いつかたへ出候へきそとへはあらおそろしやいかなる人達なれば
この所へはきたり給ふらんこれこそよそへもきこへ候せんちやうた
けおにか岩やと申ところにて候へよのつねの人はきたることはなし
あれを見たまへほりのむかひに候山よりせんちやうかたけと申て鳥
たにもかよひかたしあの山のあなたに鬼かいわやとてありける
なりさてこそおにのけんそくともか時くいて、あそひ候へ
はやくかへり給へとそ申けるかやうに申われらをおにの
ぶるひとおもひ給ふへからす我くもさりかたき人を鬼に
とられてこのかたきをとらんかためにこの所には候へともわれらか
ちからはかりにてはかなひかたくして年月を此山におくり候
なりめんくも心おき給ふへからすかたくをみたてまつるに
た、人にてはましますこれへ入給へ委物語申さんとてうちへ
しやうし入てかたりけるいかにもこのもの、心をとらんとて酒ひ
とつとり出してす、めけり三人の中にも主君人ありとお
ほしくて座上にいたりおきなさかつきをひかへて申やうかたく





▲参詣後、鬼の住処に向かう途中で出遭った三人の男達の家に立ち寄った頼光一行。
出遭う場面(後出)との錯簡が考えられる。



『大江山奇譚』

のさほう見るにふかくねんし給ふことありのまゝにかたりたまふ
 へし我等もちからをあわすへしおにかいわやのあり様をく
 はしくそんなして候へはおしへ申へしせんきまんきをそつして
 むかひ給ふとも人のちからはかりにてはゆめくかなふへからす
 神明のかごをもつてほろほしたまへと二心なげにそ申ける
 心のほとうちとけてそかたらひける頼光いかさま氏神の
 ちからをそへ給ふにやとたのもしくおほしめして有のまゝに

のさほう見るにふかくねんし給ふことありのまゝにかたりたまふ
 へし我等もちからをあわすへしおにかいわやのあり様をく
 はしくそんなして候へはおしへ申へしせんきまんきをそつして
 むかひ給ふとも人のちからはかりにてはゆめくかなふへからす
 神明のかごをもつてほろほしたまへと二心なげにそ申ける
 心のほとうちとけてそかたらひける頼光いかさま氏神の
 ちからをそへ給ふにやとたのもしくおほしめして有のまゝに



▲参詣後、鬼の住処の千丈ヶ嶽に向かう途中で三人の男達に出遭う
頼光一行。

出遭った男達の家立ち寄り場面(前出)との錯簡が考えられる。



そがたりあひまう三人のくたまひけるは御こゝろさし
あさからすありかたくおもひたてまつるわれらも御とも申へ
しとのたまひけるその時同心にいたりけるおきな仰候は
此おにも酒をあひしてのむうへは身のうすることもしらす
うちとくるものにて候へはこの酒をよくくゝのませてめんく
はあひかまへて一くちもまいり給ふへからすこれはすなはち
毒酒にて候なりとてうちより酒をとりいたしてかたくの
さゝいのあきたるにそ入てもたせける又ほうしかふと壺つとり
いたし頼光にたまはるとときん下にき給ふへし此鬼は神
通のまなこをもつてその人をよくくゝみて人のこゝろの
うちをもしるものなりこのかぶとたにもきたまひなはそれを
しる事ゆめく有へからすその身のつゝかも有ましたの
もしくおほしめし候へとこそそのたまひける
かの鬼は神通自在にして人をたふらかしたしぬき其
はかりことのかしこきことは中くことはにのへかたくよくく心
へ給ふへしとて三人の人々のたまひけるはおのくこの池
をこへたまはんことありかたしとてまつ三人はたやすくとひ
こへむかに大なるまきの木ありこれをおしたおしはしに



うちわたしはやわたり給へとのたまひければをのく六人めを
 見合てすこしもいそぎわたり給ふかのせんちやうかたけと申は
 見るにはんしやくことくくに雲をひきれいくたる岩は
 千谷にふさかりて人の通路もなしほうせんたる所にた、
 三人の人々をさきにたて、いたりけりあるひはさかしき
 道をはよきまさかりをもつて足かたをうち手をとりて
 ひきのほせられけるこの人々のありさまた、こと、もおほ
 へすいよく行すへもたのもしくおほへけりこ、に大なる岩
 あな有けるに内に入てみるにくらき事かきりなしせんこも
 おほへすおそろしさはいふはかりなししかりといへとも三人をせん
 たちとして行共く道もなしかの一行あしやりのるさい
 のみちにおもむきてあんけつたうにまよひしもこれにはいかて
 まさるへきとそおほへしいまは五六里もすきぬらんとおも
 ひしにほのくとあかき所にそ出たりけるまた此さきに
 川ありとのたまひけるこの川につきてのほるへしかならす鬼
 の城にてはちからをあわせ申へしたのもしくおもひたまふ
 へしわれくをはいかなるものとかおもひ給ふらんこれは八幡
 すみよし熊野、権現のすいしやくなりとのたまひて
 かきけすやうにうせたまひける



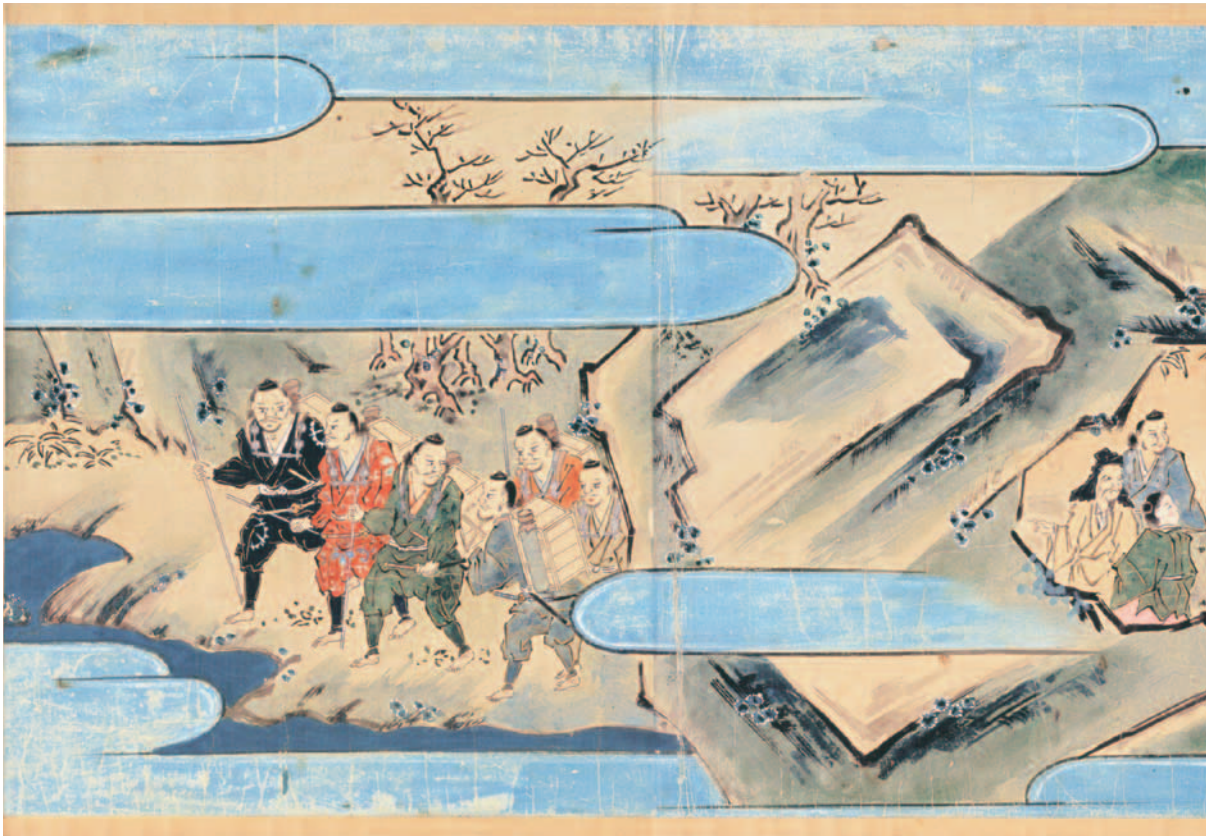
▲三人の男達の家でもてなしを受ける頼光一行。



かりければ頼光以下の人々行すへ猶たのもしく覺し
 めしいよくいさめるこゝろつきてこの川につゐてのほり
 けるこゝに年のほと十八九はかりなる女房のすかたうつ
 くしきかこの川のはたにてきるものをあらいて至り
 ける人々たちよりていかなる人そ何とてなみたをなかし
 給ふそとのたまひ(見せ消ち)へはなにとものはいわすしてた、なく
 よりほかの事

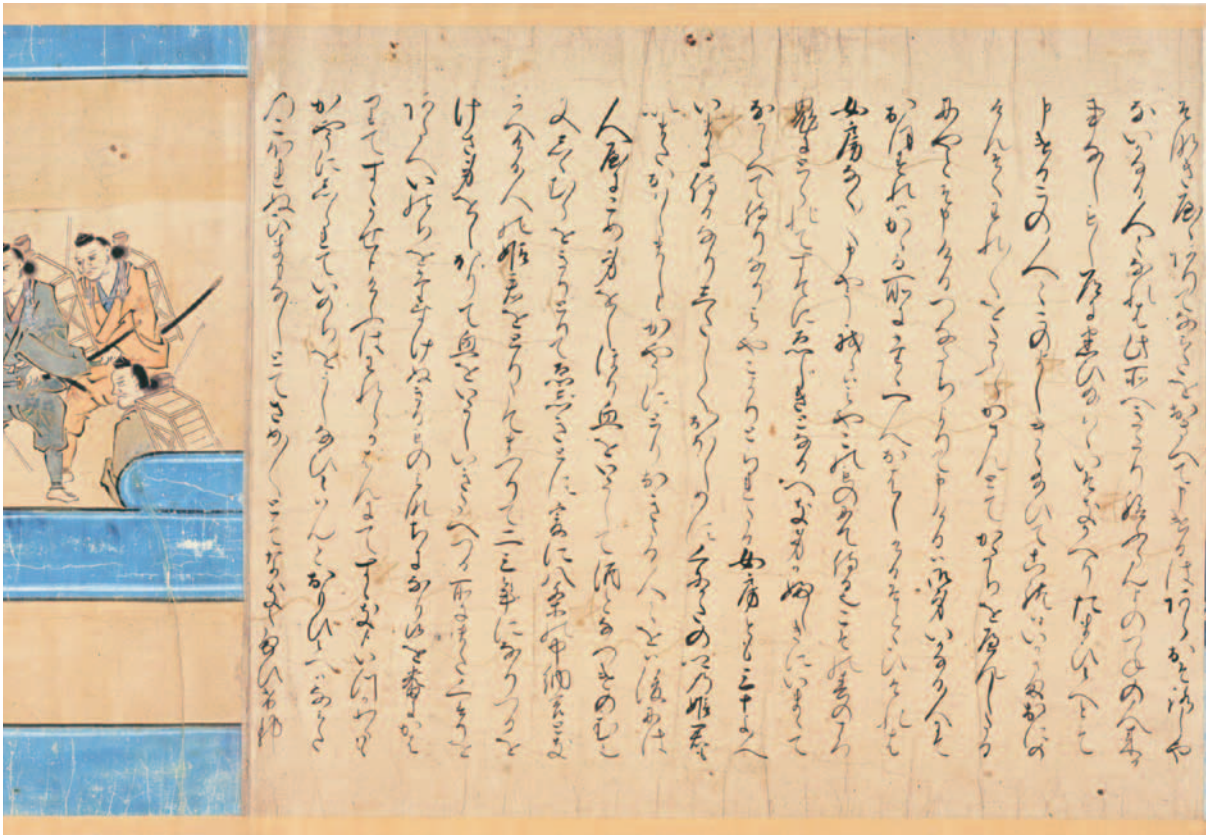
▲◀石清水八幡、住吉社、熊野三所の仏神化身であるという男三人の
 先達により、険しい山道をとおり、千丈ヶ嶽に向かう頼光一行。





▲三人の男達の先達で鬼ヶ城近くまでやってきた頼光一行。
三人の男達はいつのまにか姿を消した。

そなきや、ありてなみたをおさへて申けるはあらおそろしや
 ないかなる人々なれば此所へきたり給ふらんよのつねの人来る
 事なしもし道に迷ひ給は、いそきかへりたまひ候へどて
 申けるこの人々このよしき、給ひてこれはいかさまおにの
 けんそくわれくをたふらかさんとてかたちをへんしたる
 にやとそ申けるつなたちよりて申けるは御身いかなる人にて
 おほすればかゝる所にた、一人おはしけるそと、ひければ
 女房なくく申やう我らはみやこのものにて侍る也こそ春のころ
 鬼にとられてすてにゑじきとなるへき身かふしきにいま、て
 なからへて侍りなりみやこよりとられたる女房とも三十よ人
 いまに侍るなりしたしくおほしめすくにかたの卿の姫君も
 いまたおはしまし候かやうにとりおきたる人々をは後には
 人屋にこめ身をしほり血をいたして酒となつかけのむ也
 又し、むらをきりととりてゑじきとす爰に八条の中納言とき
 こへける人の姫君をとりたてまつりて二三年になりつるを
 けさ身をしほりて血をいたしいきたへつる所にまたくすりを
 あたへいのちをたすけぬきるものみなちになり候を番にかは
 りてす、かせ候けふはわれらかばんにてす、き候いつかわらはも
 かやうにいられていのちをうしなひ候はんとおもひ候へはなみた
 のこほれぬひまもなしとてさめくとそなきたまひける





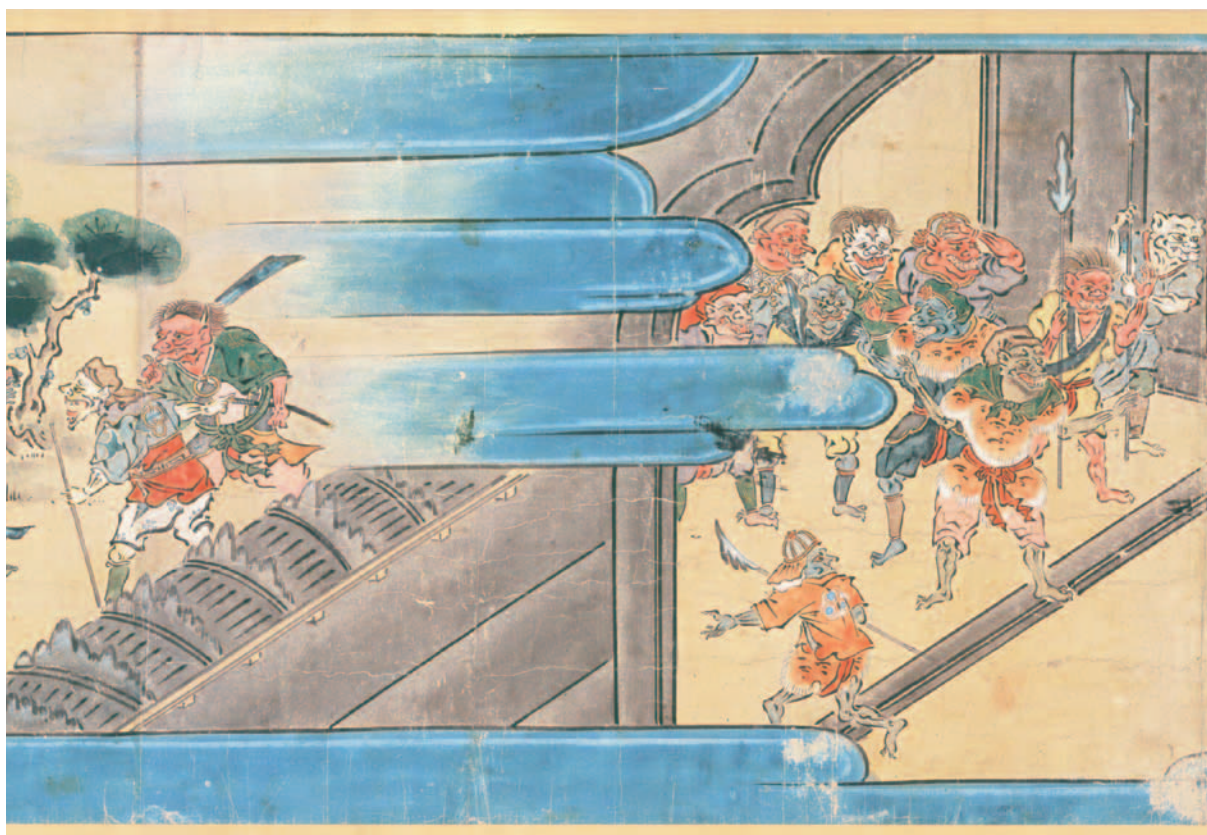
▲鬼ヶ城近くの川で洗濯する女房に出遭う頼光一行。

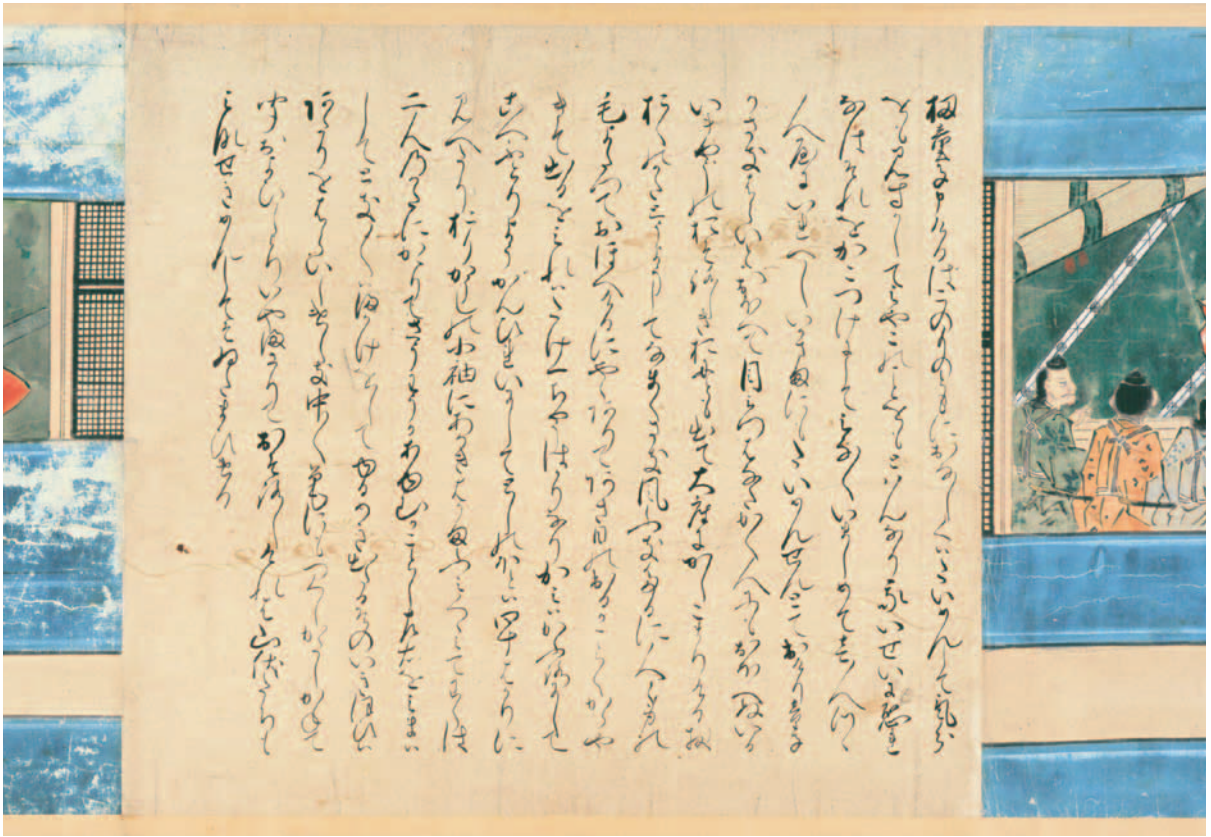




◀ 平気な顔をして中に入った頼光一行。

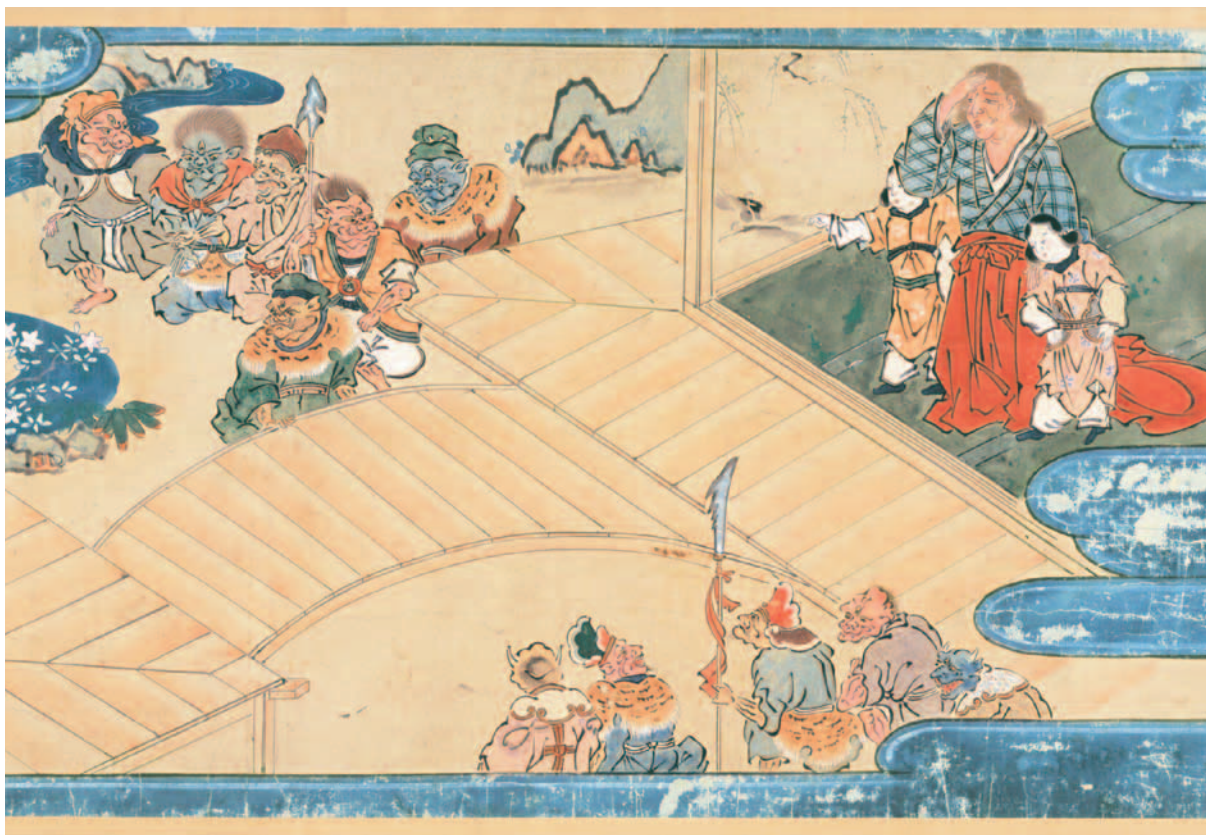
▲ 鬼の住処にたどり着いた頼光一行。





扱童子申けるはこのものにおなじくはたいめんして氣分
 をも見ずかしてみやこのことをもとはんなり我いせいに恐れ
 なはそれをかこつけにしてみなくいましめて壱人つ、
 人屋にいれへしいかさまにもたいめんせんとて出けり童子
 かさきはらいとおほへて目みつはなたく人にもおほへぬいる
 いきやうのおそろしきおにとも出て大座にかしこまりける扱
 おくのかたとうようしてなまくさき風ふきたるに人々身の
 毛よたつておほえけるにや、ありてあさ日の出るかことくか、や
 きて出るをみればたけ一ちやうはかりなりかみはかふろにして
 こへふとりやうがんひれいにししてとのほとは四十はかりに
 見へたりおりかうしの小袖にあかきはかまふみつ、みてわらは
 二人のかたにか、りてさうわうかあゆむかことく左右をみまは
 してときくはまかけをしてゆるめき出たるそのいきほひは
 あたりをはらいしけしき中く筆にもつくしかたしかねて
 聞およひしよりいやまさりておそろしければ山伏たちも
 みなせきめんしてそゐたまひける

扱童子申けるはこのものにおなじくはたいめんして氣分
 をも見ずかしてみやこのことをもとはんなり我いせいに恐れ
 なはそれをかこつけにしてみなくいましめて壱人つ、
 人屋にいれへしいかさまにもたいめんせんとて出けり童子
 かさきはらいとおほへて目みつはなたく人にもおほへぬいる
 いきやうのおそろしきおにとも出て大座にかしこまりける扱
 おくのかたとうようしてなまくさき風ふきたるに人々身の
 毛よたつておほえけるにや、ありてあさ日の出るかことくか、や
 きて出るをみればたけ一ちやうはかりなりかみはかふろにして
 こへふとりやうがんひれいにししてとのほとは四十はかりに
 見へたりおりかうしの小袖にあかきはかまふみつ、みてわらは
 二人のかたにか、りてさうわうかあゆむかことく左右をみまは
 してときくはまかけをしてゆるめき出たるそのいきほひは
 あたりをはらいしけしき中く筆にもつくしかたしかねて
 聞およひしよりいやまさりておそろしければ山伏たちも
 みなせきめんしてそゐたまひける

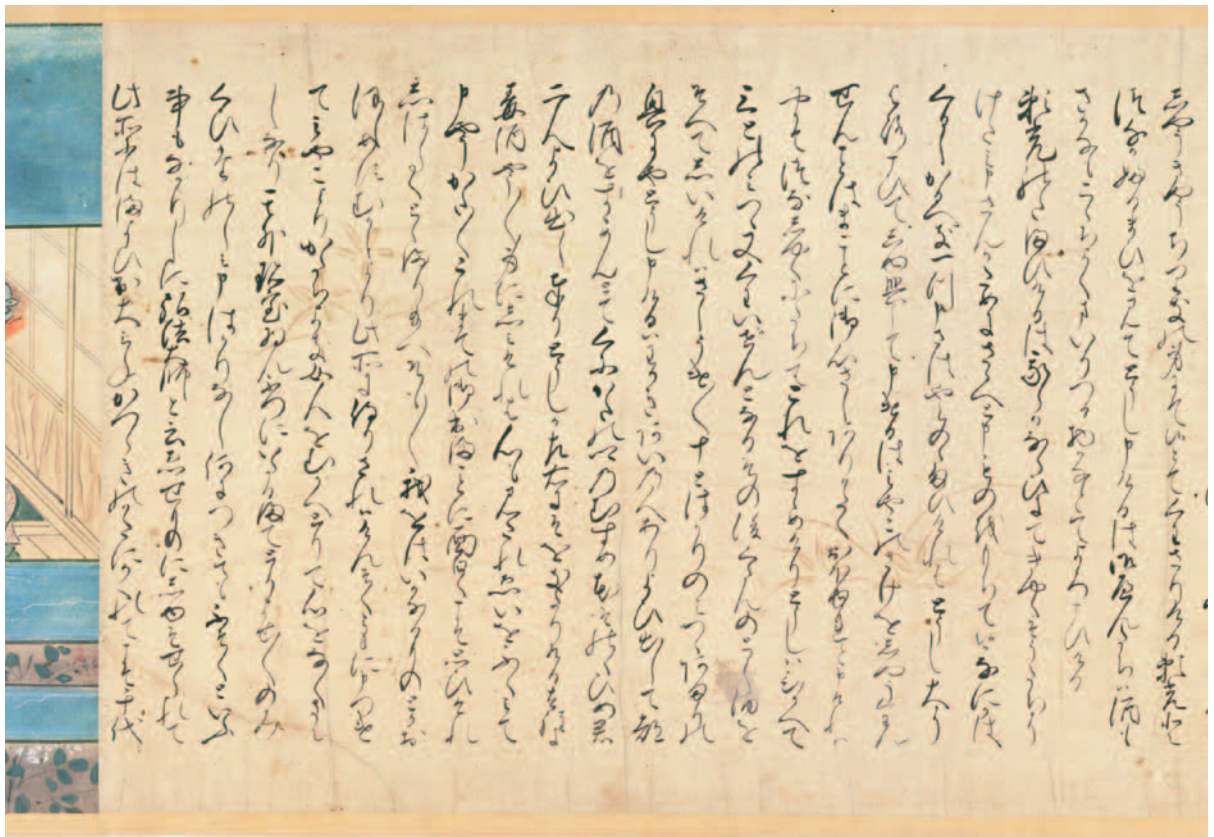


▲山伏姿の人間が鬼の住処にやってきたというので、巨体をゆらしながら出てきた酒吞童子と、それを見上げる頼光一行。



椒塗は人々の居たりけるに一間へたて、さしきに
 なおり人々にむかひのたりけり頼光以下はむかひ座にそ
 なおられけり此人々たかひにめを見あわせとやせまし
 かくやせんとあんする所に童子申やうそもく御へん達
 はなにことにより此所には來り給ふぞ深山とい、かんぜきと
 い、ちらしてまかけをさして見めくらすおそろしさいふ計
 なしきやく僧たちに酒一つまいらせよといひければけんそく
 ともうけたまはつて大なるつゝに酒をいれてかき出すつす
 をみれば人の血なりそのいろはつしみくさきことかきり
 なしまつとうしさかつきをとりたふくとうけてほし頼光
 にさしにける頼光すこしもおくせすたふくとうけてのみ
 給ふ保昌にさし給へはとりあけてのむまねをしておかれ
 ける其のちつなうけとりてたふくとうけてのみければ
 童子申けるはめつらしきさかなやあるまいらせよと申ければ
 まないたにた、いまさりたる人のも、にしほをとりそへて
 をきたりとうし申けるはたれかあるこしらへてまいらせ
 よといひければ頼光さしよりてこかたなをぬきし、むら
 をそいでしほにさしてくい給ふしゆせうの物かなとのたまひて
 うらひいあはれかきさしよりてくい給ふしゆせうの物かな

擬童子は人々の居たりけるに一間へたて、さしきに
 なおり人々にむかひのたりけり頼光以下はむかひ座にそ
 なおられけり此人々たかひにめを見あわせとやせまし
 かくやせんとあんする所に童子申やうそもく御へん達
 はなにことにより此所には來り給ふぞ深山とい、かんぜきと
 い、ちらしてまかけをさして見めくらすおそろしさいふ計
 なしきやく僧たちに酒一つまいらせよといひければけんそく
 ともうけたまはつて大なるつゝに酒をいれてかき出すつす
 をみれば人の血なりそのいろはつしみくさきことかきり
 なしまつとうしさかつきをとりたふくとうけてほし頼光
 にさしにける頼光すこしもおくせすたふくとうけてのみ
 給ふ保昌にさし給へはとりあけてのむまねをしておかれ
 ける其のちつなうけとりてたふくとうけてのみければ
 童子申けるはめつらしきさかなやあるまいらせよと申ければ
 まないたにた、いまさりたる人のも、にしほをとりそへて
 をきたりとうし申けるはたれかあるこしらへてまいらせ
 よといひければ頼光さしよりてこかたなをぬきし、むら
 をそいでしほにさしてくい給ふしゆせうの物かなとのたまひて
 あちはひ給ふつなもさしよりてくい給ふしゆせうの物かな



『大江山奇譚』

しゃうきやうちりきの身にて候とてくわさりける頼光と
 つなかふるまひを見てとうし申けるは御へんたちは酒も
 さかなもこ、ちよくまいりつる物かなとてよろこひける
 頼光のたまひけるは我らかならひにてきやくそうたちに
 けたみ申さんかためにさ候へと申ものもちて候かなにかは
 くるしかるへき一つ申さはやとのたまひければとうし大に
 よろこひてしゆ興して申けるはみやこのさけをしゃうくわん
 せんことはまことに御心さしありかたくおほゆれと申ければ
 やかてつなしゆくにたちてこれをす、めけりとうしはひかへて
 三とのみつ、又くわいぜんとなるその後くたんのとく酒を
 そへてしいければさしうけく十とはかりのみつ、あまりの
 興にやとうし申けるはわかきあいの人ありよひ出して都
 の酒をす、めんとてくにかたの卿のむすめ花その、ひめ君
 二人よひ出し奉りとうしか左右にそをきたりける去程に
 毒酒やうく身にしみければ心もみたれゑいをふくみて
 申やうかたくこれまでの御出まことに面白くこそ思ひけれ
 しはらくと、まり給へそもく我をはいかなるものとかお
 ほしめすむかしより此所に侍りされはけんそくとも申つけ
 てみやこよりかたちよき女人をむかへとりて心をなくさみ
 しなり其外瑞宝るんふつにいたるまでとりよせくのみ
 くひたのしみ申はかりなし何につきてもふそくといふ
 事もなかりしに弘法大師と云ふせものにしゆせせられて
 此所にはまよひ出大みねかつらきのかたにかくれてこそ千代



▲大勢の眷属達に酒や肴で客人をもてなしさせる酒吞童子。



▲顔色も変えずもてなしを受ける頼光一行。

をへしに此ゑせものとうしはかうやと申所にこもりぬ其
 後はみちひろくなりてこの百余年は此所に侍り也この
 女房達もみやこより請して候人おほく候へともこれらはさい
 あひに思なりいかなる世までもちきりをむすひ候はんとおもふ
 なりいまより後はなに事に付ても都の事をはをのくに
 たのみ申さんさりなから心にかゝることありみやこに頼光と
 いふくせもの有いにしへ今にこれほとふいにたつせるものは

新うん武二たへんやうへはすくして仁義の道を心かけ
天下のまつり世にすくれまなこのひかりもすくれてむかふ所
のかたきたいらけんといふ事なしときこゆるこのほどもけ
んそくとも出けるにこの頼光からうとうにゑせもの有其名
をつなといふ者さんくにおとしけるなりさりながら用心
つよくしてけんそく共を番におく問いかなる頼光つな也
とも此城をはやふられ申ましをのく見たまへ此城の
つよきをなと、申して山ふし達をよくく見て又申けるは
御へん達をよくくみればかの頼光かとみへたりのこる四人
の人はつなさんときさたみつすへたけかとおほえたり荒おそろ
しやこれにありあふおにとも心はしゆるすなと、てよくく
見ればかのほうしかふとをき給へともゆへにいかみんとすれとも
みへさりけりされはこのためにおきなあなたへ給ひける也さて
頼光のたまひけるはそもくその頼光とやらんはいかなる人にて
や侍らんすへてそんなあやうの人ありともうけたま
はらすた、しみやこひろく候へは其事ともや候はん我らは出羽
の國羽黒の山ふしにて候か熊野にとし籠りして此ほと
はしめてみやこに上りて候か古郷へかへるとて道にまよひて
まいり御目にか、り候へは悦ひ存候とまことしやかにのたまへは
とうしさけのすいけうといひしゆけうに心中をのこさす申
けるは我神通のまなこにて人をみるにたかはす御へんの
まなこの色は世人にかはれり同道の人々をもみるにつたへ
きく頼光か四天わうのものともにさもにたり中にもあの山
ふしはつらたましゑまなござし人にすくれてみへたりとて
つなをさしてそ申ける

なしふん武二道のたつしや人にすくれて仁義の道をも心かけ
天下のまつり世にすくれまなこのひかりもすくれてむかふ所
のかたきたいらけんといふ事なしときこゆるこのほどもけ
んそくとも出けるにこの頼光からうとうにゑせもの有其名
をつなといふ者さんくにおとしけるなりさりながら用心
つよくしてけんそく共を番におく問いかなる頼光つな也
とも此城をはやふられ申ましをのく見たまへ此城の
つよきをなと、申して山ふし達をよくく見て又申けるは
御へん達をよくくみればかの頼光かとみへたりのこる四人
の人はつなさんときさたみつすへたけかとおほえたり荒おそろ
しやこれにありあふおにとも心はしゆるすなと、てよくく
見ればかのほうしかふとをき給へともゆへにいかみんとすれとも
みへさりけりされはこのためにおきなあなたへ給ひける也さて
頼光のたまひけるはそもくその頼光とやらんはいかなる人にて
や侍らんすへてそんなあやうの人ありともうけたま
はらすた、しみやこひろく候へは其事ともや候はん我らは出羽
の國羽黒の山ふしにて候か熊野にとし籠りして此ほと
はしめてみやこに上りて候か古郷へかへるとて道にまよひて
まいり御目にか、り候へは悦ひ存候とまことしやかにのたまへは
とうしさけのすいけうといひしゆけうに心中をのこさす申
けるは我神通のまなこにて人をみるにたかはす御へんの
まなこの色は世人にかはれり同道の人々をもみるにつたへ
きく頼光か四天わうのものともにさもにたり中にもあの山
ふしはつらたましゑまなござし人にすくれてみへたりとて
つなをさしてそ申ける



▲頼光達の持参した酒が毒酒であるとも知らず、和気あいあいともてなし、もてなされる童子と頼光達。



六人かゝる毒酒をのみたまはねは色もちかわす童子
 は次第にしやうねみたれて居たりしに酒吞とうし申けるは昔
 弘法大師と云ふ僧の侍りしかはとも又おもひいたし
 たり若さやうのくせものきたるらんとおもへはかくのことは
 申なりかまひて心をき給ふなよいかにみやこの人達にさかな
 ひとつ申せと有ければいかにもあらあらしき鬼承り候とて
 ついたちてふみめぐりて

みやこ人いかなる風のさそひ来て
 さげやさかなのゑしきとやなる

六人の人々は毒酒をのはのみたまはねは色もちかわす童子
 は次第にしやうねみたれて居たりしに酒吞とうし申けるは昔
 弘法大師と云へる僧の侍りし故に候へとも又おもひいたし
 たり若さやうのくせものきたるらんとおもへはかくのことは
 申なりかまひて心をき給ふなよいかにみやこの人達にさかな
 ひとつ申せと有ければいかにもあらあらしき鬼承り候とて
 ついたちてふみめぐりて

みやこ人いかなる風のさそひ来て
 さげやさかなのゑしきとやなる



▲興に乗った鬼がひとさし舞を舞う場面。

と二三へんうたひてまいにけりゑしきといふは此人々を
 酒さかなにせんといふ心なり人々此ことはを聞からに物す
 こく思はれける中にもつな思ひけるはにくきやつか申事かな
 其儀ならはとうし酒にゑいたりけん中をさしつらぬきみな



おつけて首うつほとならば世のやつはらは座敷にてうち取
 なんと思ひければまなこかたちちすちあらはれうち刀にて
 おかれければ頼光やかてみしりてしりめににらまへ給ひければつな
 は思ひと、まりぬ

▲こんどは渡辺綱がひとさし舞を舞う場面。
 床の間には冊子、巻子が並んでいる。

おつけて首うつほとならば世のやつはらは座敷にてうち取
 なんと思ひければまなこかたちちすちあらはれうち刀にて
 おかれければ頼光やかてみしりてしりめににらまへ給ひければつな
 は思ひと、まりぬ



去程につなは都にかくれなき舞の上手にてありければとうしか
 ひかへたるをみず、みいて、申けるはわれらもさかなひとつまいら
 せんとて
 年をふる鬼のいわやに風のきて
 夜まに花を吹ちらすらん
 と二三へん心ことはもおよはず舞ければとうしき、とれてそ
 ゐたりけりにわになみ居ける四天王と聞へし鬼ともこの
 舞の言葉をはき、しらすた、おもしろきとはかりにておもひ
 けるこそおろかなれその後とうしもつてのほかに酒にゑひ我
 身のたいには女房達を置きやくそう達に酒す、めたまへ我等
 はいとま申也明日こそげざんにいり申へけれとてつねのすみかへ
 入にけり其時頼光二人の女房たちにのたまひけるはみやこ
 と仰られけるはいか成人にておはするとのたまひければ女房仰
 けるはわれは花その、中納言の姫也かりそめにとられ侍りてか、るうき
 めを見侍る也あいしたかふ人ありけれ共言葉をかはしなとす
 れはとうし大なる目をいたしてにらまへ侍る也その時は心も
 きえいる心ちし侍る也露のいのちなからへて侍るゆへ御身達に



へり給ふ人々城の案内くわしく聞候へは嬉敷覚しめして
 行給ふ其後此女房達とくしゆをとりいたしてけんそくの鬼
 ともにもり給ふこのどくのさけすこしなりとも身に候へははる、
 心ちもなきにいはんやそくばくのさけこふくと受のみければ
 あんのごとくにふしまろひあるひはかうへを抱てにくるもありの
 これるおにともさしきにねるもあり又はゑんのうへよりはき
 かへすも有そのうちにとくのさけのまぬおに二三人ほと有
 てゑいたる鬼ともをかたにかけてのく所もありけり

かへり給ふ人々城の案内くわしく聞候へは嬉敷覚しめして
 行給ふ其後此女房達とくしゆをとりいたしてけんそくの鬼
 ともにもり給ふこのどくのさけすこしなりとも身に候へははる、
 心ちもなきにいはんやそくばくのさけこふくと受のみければ
 あんのごとくにふしまろひあるひはかうへを抱てにくるもありの
 これるおにともさしきにねるもあり又はゑんのうへよりはき
 かへすも有そのうちにとくのさけのまぬおに二三人ほと有
 てゑいたる鬼ともをかたにかけてのく所もありけり



▲不覚にも酒に酔った童子は早々と寢所に退散し、残った眷属たちは毒酒に躰の自由を奪われ苦しむ場面。



「大江山奇譚」



こはくし、むらもあつくしておもしろきところもありわれかく
てあひなはすかたにおちをそれ候て心をつくしなは身も

こはくし、むらもあつくしておもしろきところもありわれかく
てあひなはすかたにおちをそれ候て心をつくしなは身も

▲苦しむ鬼の眷属たちを尻目に女房達の案内で童子の寝所がある堅
固な守りの城に入ろうとする頼光一行。



やせし、むらきえてちすくなかるへしよく／＼すかしして心を
 とりまたみやこよりきたれる物ともならはみやこの事をも
 とひ侍るそのうへにて老人つゝ、人屋にいれて至なんとけん
 そくともに申ければけんそくのおにともなのめならず悦ひ候
 いかちせんやうにして門外に出この人々をつ／＼とそま
 ほりぬけるおそろしきことかきりなし



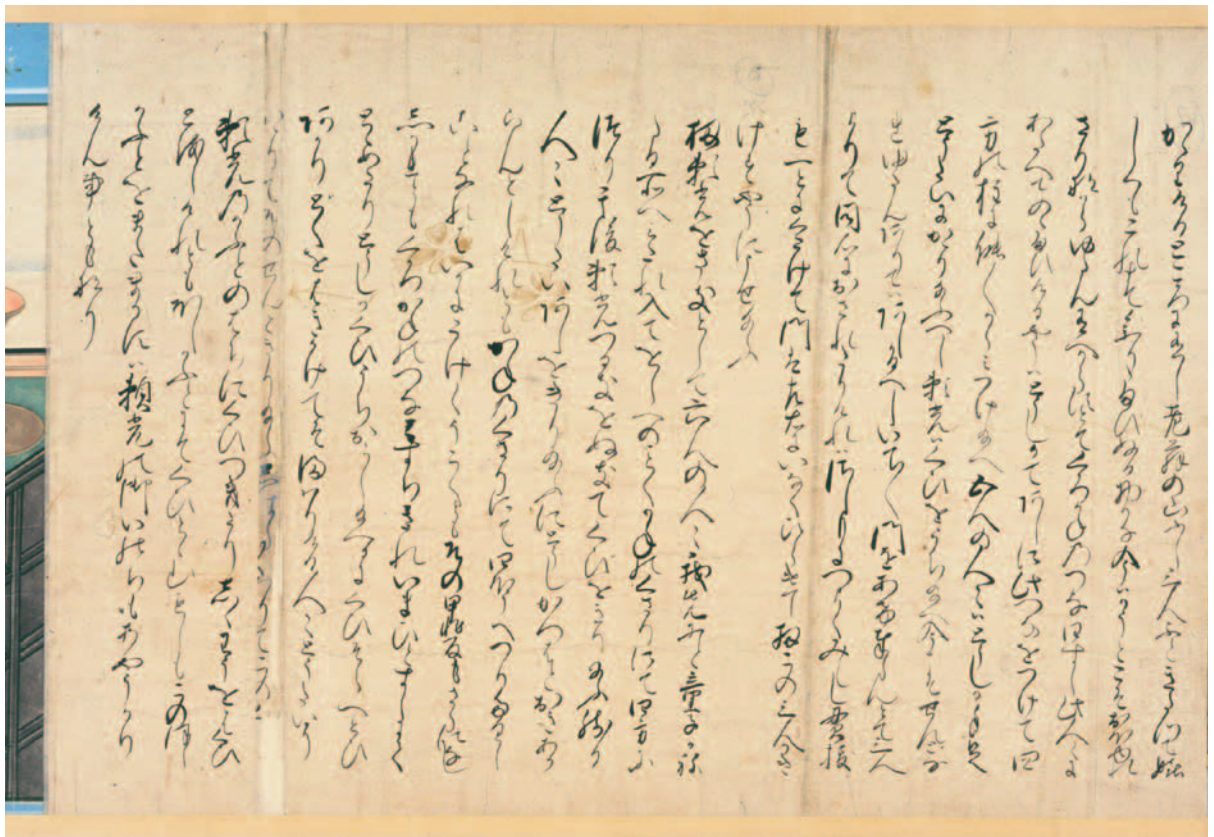
▲堅い守りの扉であるが、六人の力を合わせて開こうとする場面。



▲寝所に横たわる童子の姿は客殿のそれとほうって変った大鬼の形相。

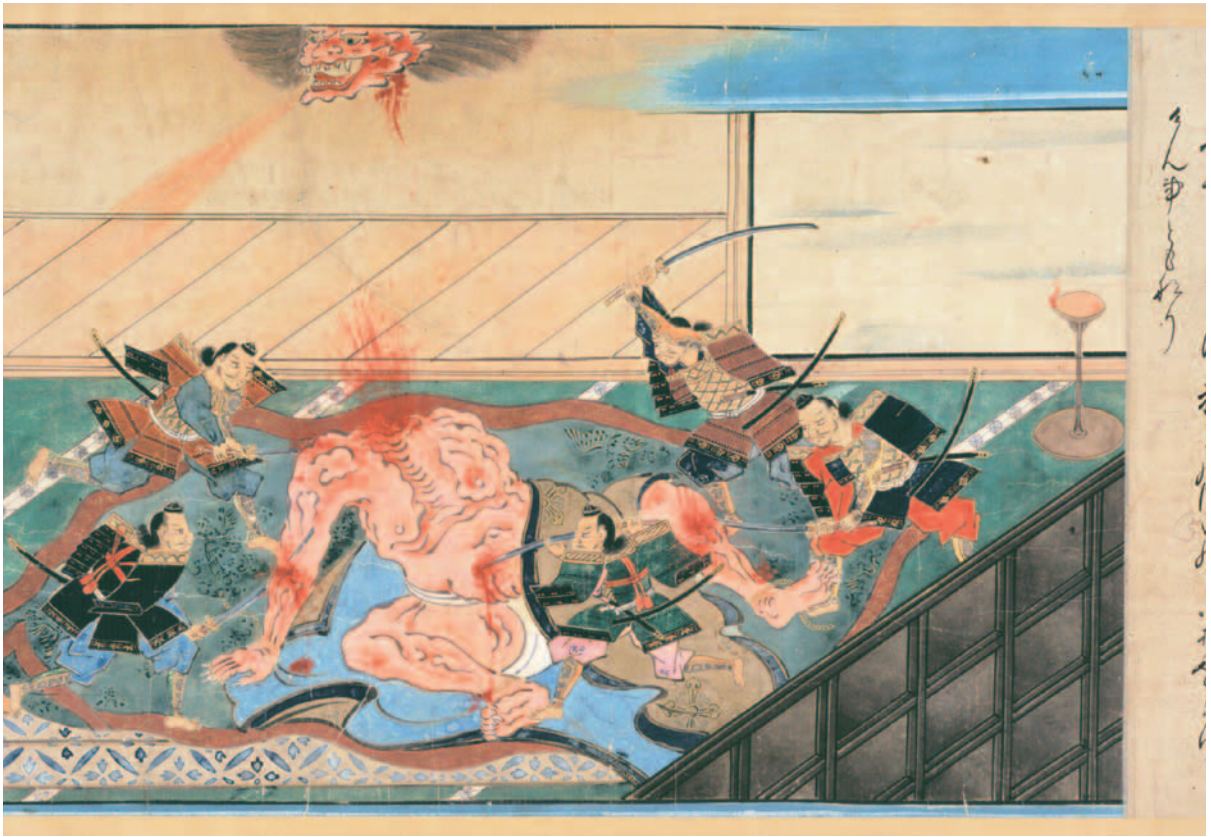


▲先達となって鬼ヶ城へと案内してくれた仏神化身の男達が再び現れ、扉を開く力と討ち損じないように括り付ける鎖を頼光達に与える場面。



かゝりけるところ有し老翁の山ふし三人ふときたつて嬉
しくもこれまで参りたまひぬる物かな今はかうとこそおほゆれ
さりなからゆたん有へからすとてくろかねのつな四すし此人々に
あたへてのたまひけるやうはどうしかてあしに此つなをつけて四
方の柱に能くからみつけ給へ五人の人々はとうしか手足
どうたいにかゝり給ふへし頼光はくひをうち給へ今こそせんとな
れゆたんありてはあしかるへしいてく門をあけ奉らんとて三人
よりて同心におされたりければさしもにつよくみえし貫抜
も一とにくたけて門は左右にいななくひらけて扱この三人かき
けすやうにうせ給ふ

扱頼光をさきとして六人の人々我先にと童子かね
たる所へみたれ入てをしへのことくかねのくさりにて四方に
つり其後頼光つるきをぬきてくびをきり給ふ残る
人々とうたいあしをきり給ふにとうしかつはとおきあか
らんとしけれともかねのくさりにて四ほうへつりたりし
ことなれはいかにたけくうこくともその甲斐もさらになし
しかれともくろかねのつなみすちきれいまひとすしにて
と、めたりとうしかくひうちおとし給へるにくひそらへとひ
あかりどくをはきかけてそまはりける人々とうたいに
□、りてそのせんときり給ふしはらくありてこの□
頼光のかふとはちにくひつきたりし、わうをはくひ
とをしけれともほしかふとにてくひと、むもしもこのほし
かふとをまたまかすは頼光の御いのちもあやうかり
けん事ともなり



▲童子の手足を鎖で繋ぎ、頼光が童子の首をはね、血しぶきの上る場面。



其後首をうちおとしぬいまはけんそくのやつはらをうたん
 とてめんく又か、られけり童子かまくらにありけるまさ
 かりをは綱とりて出にけり去程にゑいふしたるけんそく
 ともおとろきあわて候これはひるの山ふしのしわさなるへし
 あますなもらすなとて石はしの上へをめきさけんでせめて
 のほる其こへはばんしやくもくつる、かとおひた、し頼光
 保昌のたまひけるはいまはなにともあれ童子をうちぬるうへは
 けんそくのものともはいかほとありてもうちとるへしとていさみ給
 ひてたかき所にたちならひ四天わうの人々に下知してかの石
 はしをおひくたし五六とこそせめた、かいけるこ、にまたゑん
 わうといふ大ちからのくせもの有かれとつなはおしならへてくん

うりなつたつたにせうりすはよりやうめくへど
丁が保昌はつこりしをんまうさうらひかひめ
うり又すへけきりまうとまうせいのとまういり
ちりとらうまうまうあひたさしてうとまうまう
うひまうまうまうまうまうまうまうまうまう
うけとまうあせて首とくんとまうまうまうまう
ししてすくくとまうまうまうまうまうまうまう
うりかひまうまうまうまうまうまうまうまう
丁もかりまうまうまうまうまうまうまうまう
いひまうまうまうまうまうまうまうまうまう
うしてまうまうまうまうまうまうまうまう
まうまうまうまうまうまうまうまうまう
けあまうまうまうまうまうまうまうまう
けり鬼とも酒をものまうまうまうまうまう
はめて二十四人のおにともいかつちのなるか
まうまうまうまうまうまうまうまうまう
まうまうまうまうまうまうまうまうまう
丁木にまうまうまうまうまうまうまうまう
にまうまうまうまうまうまうまうまうまう
まうまうまうまうまうまうまうまうまう
まうまうまうまうまうまうまうまうまう
まうまうまうまうまうまうまうまうまう
まうまうまうまうまうまうまうまうまう



たりけるかつなは下にそなりにけりすてにあやうたるへきと
ころに保昌さつとよりてゑんわうか首をうちおとしたまひ
けり又すへたけはきりわうと云くせものとた、かいけり
太刀をくきななにとりなかし火をちらしてこ、をせんと、きり
あひけるにきりわう大ちからなりければいか、はしたりけんすへ
たけをとりふせて首をか、んとしける折ふし頼光御らん
してするくとはしりよりきりわうかくひを水もたまらす
うちおとし給ふと二人のくせ物とも頼光にめをかけて
こそか、りけり六人の人々まん中にとりこめてせめた、か
ひければつるにこ、にてうたれにけり其外鬼ともはいまた
ふしてゐたるもありみなくはいありてなればこ、かし
こにてさしころしけり是しかし神の御めくみかたし
けなきこと、もなりこ、にまたそうもんをかためてあり
つる鬼とも酒をものますこのことはをはるかの後に聞
つけて二十四人のおにともいかつちのなるかことくにてこみ
入けりいまはこれかきりのた、かひなりければまた四人のと
もからをまつさきに立ておめいてかけ入ゆんでめてくもで
十文しにきりめくりければ爰かしこにてことくうたれ
にけり今はたてあふものもなかりければ童子かすみける
おくのしろきを見給ふに三十よ人の女房をこめおき
たり此人々いくさのこへ天地をひ、かしければいまや
かきりときをけし心をくたき給ふところに鬼ともこ



「大江山奇譚」



▲眷属の鬼たちを討ち取る場面。



シハクウタれぬとききてひめいんをまつけ給ひける
 んひりこれや此ちこくのさいにんのちさうほさつをみて
 よろこひたてまつるこれにはいかてまさるへきめんく
 手を合てみなくうれしくなきにそなき給ふ後女房を先
 達として二ちう三重にかまへをきたるところくを見た
 たまふにとうしありしとききんくをちりはめ七珍万宝
 をあきみちたるらしとみえしかみな一時にきえうせぬ
 春夏秋冬の

面白かりし所も
 かんくつのそひへ
 たる
 はかりなん

とくくうたれぬとき、てかの人々を見つけ給ひける
 心のうちこれや此ちこくのさいにんのちさうほさつをみて
 よろこひたてまつるこれにはいかてまさるへきめんく
 手を合てみなくうれしくなきにそなき給ふ後女房を先
 達として二ちう三重にかまへをきたるところくを見た
 たまふにとうしありしとききんくをちりはめ七珍万宝
 をあきみちたるらしとみえしかみな一時にきえうせぬ
 春夏秋冬の

面白かりし所も
 かんくつのそひへ
 たる
 はかりなん



▲毒酒に苦しむ鬼たちを次々と討ち取る場面。



おのけきんぐものすまみかなをあるよしを女房たちのた
 まひければしるへしてさかし給ふに金熊童子とて一人当
 千の鬼あり大ちからにてき、あしはやのくせものなりとく
 酒をせめられてつよくゑいければおにのいはやにふして
 しにんのごとくにて有けるかはるかの後におとろきてき、
 つけくちおしき事かなとおもひつることよとて二人の者
 ともつるきをぬききつさをならへてはしりいつる今は
 人もなしとおもひける所にはしりむかひければめんく
 わりなくた、かひしやうくかきりなしされともいつもさは
 かぬ人々なればおもてもふらすた、かふあいたすいふんのか
 ものなりといへともまさるかたきあいぬれはいわやのゆへそ
 ひきこもりける頼光仰せられけるはこのかんくつをやふり
 かたしめんくひきしりぞき給へさためてかつにのりて出へ
 しそのときうしろをきりてうつとるへしと下知し給ひ
 ければもつともとてめんくわれさきへとそひき給ふ二人の
 とうしあるやとよろこひて大手をひろけておひてかゝるはる
 くくとをひついたしてつないげ二人のものともめをきつと
 見合一人に二人つ、よりてくみたるを頼光保昌あます
 ましとて一人つ、より給ひたりければ石熊とうし金熊童
 子といけとりにこそしたりける



『大江山奇譚』

▲毒酒に苦しむ鬼たちを討ち取る場面。

有いはやの内をみれば人のほねともふるきあたらしき
しがいうちつみたり又は人をすしにしたるものありこゝに

いまたあたらしき女房の手あしもなきしかいありこれはいかなるものにてか有らんとの給へは女房達なく申けるはこれこそほり江のひめ君にて候へ此二三日身をしほりちをいたしいきのかよふばかりにて侍しをきのふの御さかなにいたしてこそ候へそれはこのひとのもゝにて候へと申ければあなむさんや人こそおほけれこのはんにあたりてうせんかことに此たひのかれなは都へかへりて父母をも見たまはんにとそ人々給ひけるかれらは神通かうりきものなれは七すちのつなにてしはりけりこの童子にかきらすいづれも皆神通自在の者なれはあるひは飛行のとくをへあるひは水に入火にいる事もたやすき物ともそかししかれともかやうにやすくとほふる事た、神通に寄たる叟なれは童子かほるひて後はかうてんらうかく四季のくわいしよもみなうせてもとのいわやとなりぬましてけんそくともかつうりきことくくうせてければ鳥のことくとひてもさらす皆々うたれにけりさらすはいかなるはかりことにてもたやすくうつことあるへからすまことに神明のちからほと有かたき事はなしさるほとにとうしかくひとむねとの者ともか首せうくとりてこれをつきになわせて山中をそ出られける三十四人の女ほうたちはわれもくとよるこひてかなわぬ山をたとりくと出給ひけるなかにほり江の姫君のことあはれにおほへて父母のかたみにも候へかいなきしかいのびんのかみをきりてもたせせんちやうかたけをいてられける



▲◀童子や鬼たちを討ち取り、とらわれていた女房達を伴って千丈ヶ嶽をあとにする一行。まわりには既に死んだ女達の屍が散乱している。



去程に頼光保昌鬼をしたかへ首をもたせ上洛した
 まふときしかはその親類の人は申におよはずき、
 およふ大名小名われもくとむかいにまいりぬそのせい
 一万よきとぞ聞へし君をはしめ奉りて上下なんによ
 きんこく他國のたうそくのこらすいて、見物すいまに
 はしめぬ事なれともこのたび天下の大事万民の歎き
 をやすめ給ひぬる叟猶萬代のすへまでも名をあけ
 給ふことよの誉これにしかんやとぞ申あひけるとうしか首
 車にのせうしにひかせ其残りをはになはせて三条
 川原より四条かはらまては見物人のこしくるまだうぞく
 男女おほくなみいたりかゝるためし上代にも末代にも
 有へきともおほへす

去程に頼光保昌鬼をしたかへ首をもたせ上洛した
 まふときしかはその親類の人は申におよはずき、
 およふ大名小名われもくとむかいにまいりぬそのせい
 一万よきとぞ聞へし君をはしめ奉りて上下なんによ
 きんこく他國のたうそくのこらすいて、見物すいまに
 はしめぬ事なれともこのたび天下の大事万民の歎き
 をやすめ給ひぬる叟猶萬代のすへまでも名をあけ
 給ふことよの誉これにしかんやとぞ申あひけるとうしか首
 車にのせうしにひかせ其残りをはになはせて三条
 川原より四条かはらまては見物人のこしくるまだうぞく
 男女おほくなみいたりかゝるためし上代にも末代にも
 有へきともおほへす



『大江山奇譚』

▲生き残った女房達をつれて下山する場面。



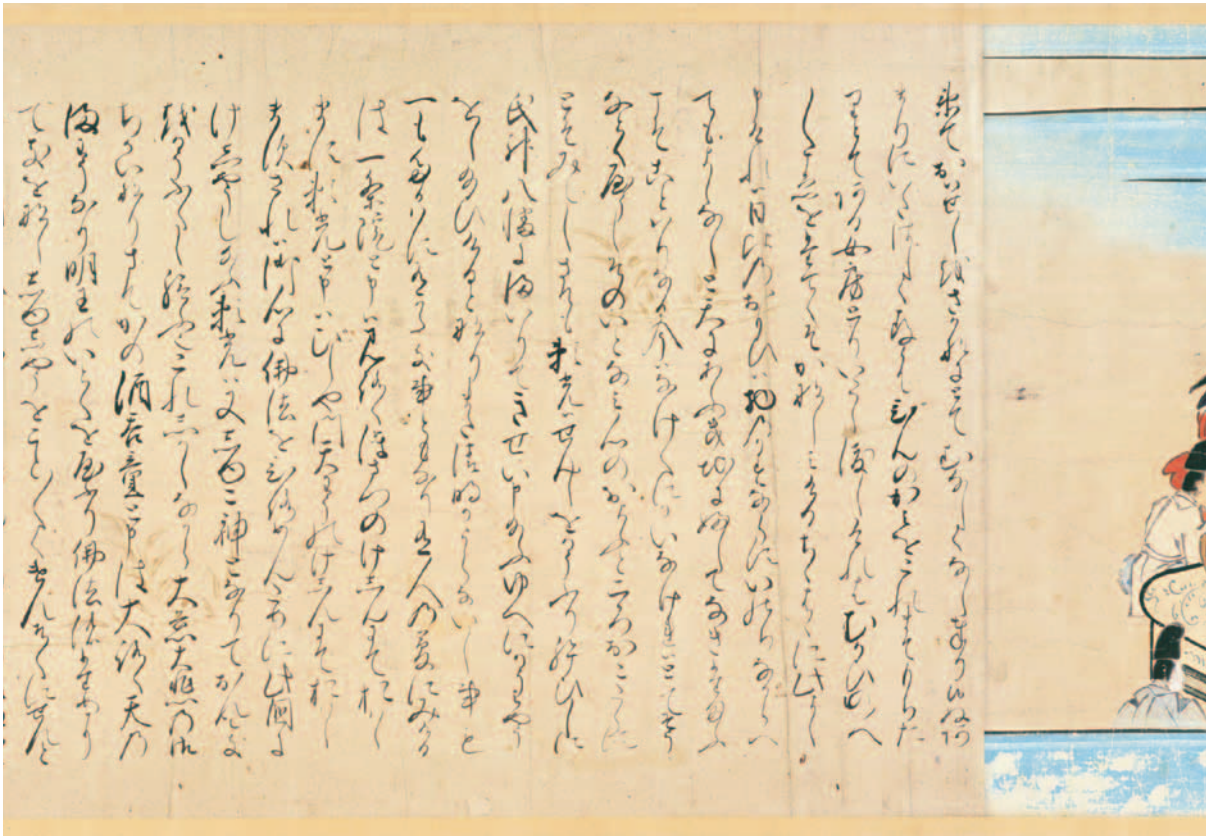
『大江山奇譚』

▲都に帰還する一行。

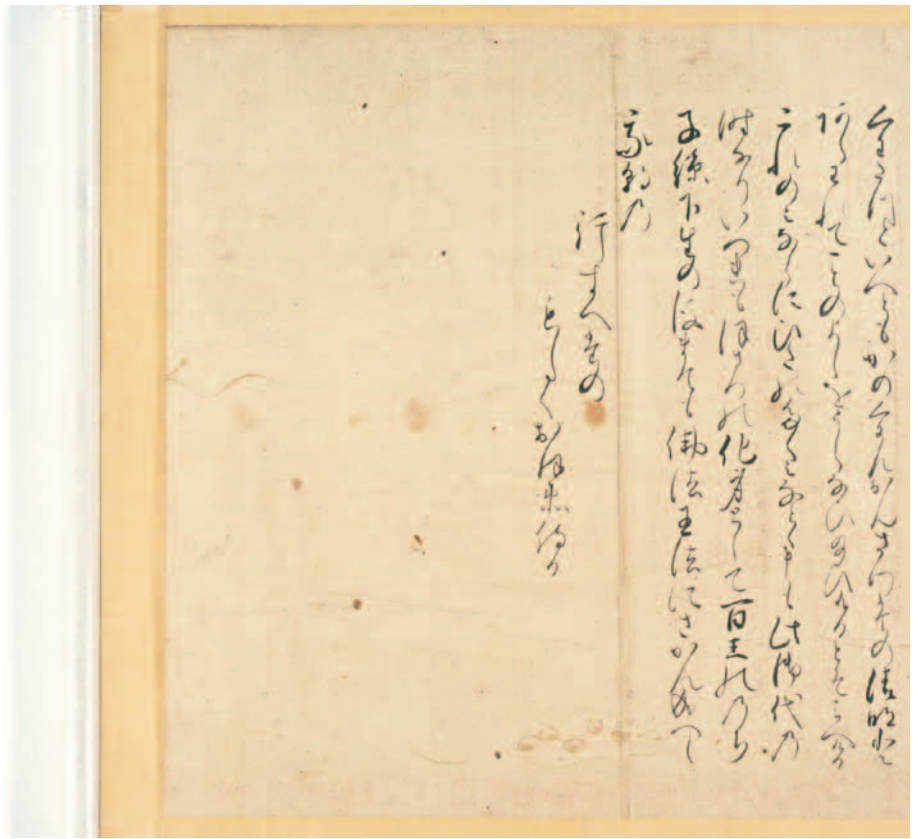


▲討ち取った童子の頭を車にのせ、鬼の首を籠に掛けて都を凱旋する一行と迎える家族や沿道の見物人。





あておはせしをさかなにとてむなしくなし奉り候ぬあ
まりにいたはしく存してびんのかみをこれまでもちた
りとある女房とりいたし渡しければむかひの人
くこゑをたて、そかなしみけるち、は、に此よし
申ければ日此のおもひは物のかすならすいのちなからへ
てもよしなしと天にあふき地にふしてなきたまふ
こそことほりなる今はなかくにかいなければとてそ
なとくやうしそのいとなみ心のおよふところおこたらす
とそみえしさても頼光はせんしをかうふり給ひしに
氏神八幡にまいりてきせい申給ふゆへにかうみやう
をし給ひけるとなりまた清明かうらないし事も
一もたかはす有かたき事ともなり有人の夢にみける
は一条院と申はみろくほさつのけしんにておはし
ます頼光と申はびしや門天わうのけしんにておはし
ますされは御心に佛法をひろめんために此國に
けしやうし給ふ頼光は又しゆこ神となりておんてき
をかうふくし給ふ也これしかなから大慈大悲の御
ちかいなりさてかの酒吞童と申は大ろく天の
まわうなり明王のいとくをやふり佛法のために
てきをなししゆしやうをことくくけんそくにせんと



今更なれどもこのかんのんさつたの清明と
 けつてこのりくさうあひひかりとをさか
 しのとあにひさかきとあきしけ御代の
 けつつすもほられ化者うて百王のち
 子孫下生のほまとも佛法王法にさかん成へ
 我朝の

行すへたの
 としくおほえ侍る

くわたつといへともかのくわんおんさつたの清明と
 あらわれてことのよしをうらなひ給ひけるとそみへける
 これのみならずひたのたくみなど、申も此御代の
 時なりいづれもほさつの化身として百王ののち
 子孫下生の後までも佛法王法にさかん成へし
 我朝の

行すへたの

もしくおほえ侍る

JOSHO

BUKKYO UNIVERSITY LIBRARY BULLETIN



佛敎大学

— 〈 後記 〉 —

寒暖のピークがことのほか大きく波打っているこの春ですが、学業に区切りをつけて巣立つ方々、あたらしい課程で研究を深めようとされる方々、さらなる研究を追究される方々、それぞれの節目を迎えておられることでしょう。

図書館は、今年度（2009.4）、福井京子専門員迎えました。山崎高哉館長が本年度末をもって退任することになりました。利用者の学修・研究の支援を目標に掲げる本学図書館のために、就任以来つねに尽力された教授に館員一同感謝申し上げます。

常 照 — 佛敎大学図書館報 第59号

平成22年3月1日 発行

編集・発行 佛敎大学図書館

〒603-8301 京都市北区紫野北花ノ坊町96

TEL 075 (491) 2141 FAX 075 (493) 9042

印 刷 株式会社 図書印刷 同朋舎

〒600-8805 京都市下京区中堂寺鍵田町2

<http://www.bukkyo-u.ac.jp/lib/>